
日本崩壊～最期の抵抗～

緋炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日本崩壊〜最期の抵抗〜

【Nコード】

N0767G

【作者名】

緋炎

【あらすじ】

西暦2012年、日本は有史以来最大の危機を迎えていた。原因は権力を掌握した平和団体。日の目を見る事が出来なくなった保守・右翼団体は中国に日本を売り渡そうとする平和団体に最期の抵抗を試みる。日本の命運を賭けた戦いが今、始まる。 注意
政治色が濃いので左翼の方は閲覧をご遠慮願います。

プロローグ（前書き）

政治色が非常に濃くなる可能性が高いので、左翼の方、共産主義者の方、市民団体の方は出来る限り見ないで下さい。

ブローグ

日本。

それは世界で最も長く続いている王室（皇室）を象徴とし、2000年以上もの間独立を維持してきた国家である。

日本はその地理的重要性からいつも他国の侵略による滅亡の危機にあった。

最も有名な例を挙げるならば、元寇と日露戦争だろう。

しかし、現在の日本人は昔起こった侵略の歴史を忘れ、平和運動に精を出した。

平和が大事なのは間違いない。

しかし、ただ盲目的に戦争反対・平和万歳と叫んでもそれで本当に平和になる訳では無い。

何故、戦争が起こり、何故平和が永続しないのかを知らない限り、彼等の平和運動は何の効果ももたらさない。

平和を守るためにはどうすれば良いのか。

それを知らない限り、彼等の平和運動は薄っぺらく、『自分は愚かしい戦争に反対しているんだ！』と言っただの自己満足でしか無い。平和を守るために武器を捨てろ、と言った政治家がいた。

しかし、武器を捨てるのは侵略国の野心を煽るだけだ。

第二次世界大戦時代、デンマークは非武装中立国家だった。

ドイツ第三帝国がデンマークに侵攻した時、ヒトラーは非武装国家のあまりのあつけなさに驚いた。

そして、世界征服と言うナポレオン以来の誇大妄想に囚われ、戦線は拡大していった。

このように、非武装になった場合、平和を自らの手で崩壊させてしまう事があるのだ。そして、日本の平和団体はその史実を知らずにただ自衛隊の廃止・解体を求めてデモ行進を行う。

隣には中国と言う日本侵略の野心剥き出しの国家や、対馬返還要求

を国会決議しようとする韓国がいると言うのに、それを知っていないふりをして『戦争反対・平和万歳・自衛隊廃止』と叫び続ける平和団体。

彼等の言う平和とは、一体何なのだろうか。

そしてこれはそんな平和団体とその支持者が権力を握った時の物語。

第一章 崩壊 第1話 武器廃棄施設

西暦二〇一二年五月二十七日午後十一時。

雨が降る中、長野県と群馬県の県境沿いに位置する山、浅間山の麓にある森に三十人前後の男たちがいた。

「ここが、その？」

彼らの中で一際の異彩を奏でる少女が小さな声で隣にいる中年の男に尋ねる。

「ああ。ここが、自衛隊の武器廃棄場だ」

中年の男は確かにここだ、と確認し、少女に言った。

彼らがいる場所は、3ヶ月前に完全解体された、自衛隊の兵器廃棄施設の外壁だったのだ。

4年前の総選挙で大勝利を収めた民進党は、経済対策こそ真面目に行ったが、外交、防衛、治安維持には全くの無関心で、『外国人参政権付与法案』と言う国家運営外国人委任法案や、『人権擁護法案』と言う人権擁護とは名ばかりの、人権の美名による言論弾圧法案を成立させたばかりか、自衛隊の解体までもを行ったのである。

それらは全て、中国の支援を受け、中国に忠誠を誓った『平和市民団体』の望みである、『日本崩壊』計画の最終段階であった。

民進党の議員の六割は『平和市民団体』の構成員かその支持者であった。

残りの四割も六割の議員たちに洗脳され、中国のスパイと成り下がった。

そして、人権擁護法が施行されると同時に保守・右翼団体の一斉摘発が始まった。

人権擁護法による摘発は警察の管轄外であり、人権擁護委員会と呼

ばれる組織の独断で摘発が行われる。

また、人権擁護委員会は民間人への委託さえもが可能であり、この場合『平和市民団体』へ委託された。

これによって人権擁護委員会と言う第4の権力による保守・民族的言論が弾圧される事となる。

保守系識者はその殆どが逮捕され、監獄に繋がれた。

ネット上での言論も統制が開始され、掲示板での自由な議論の場さえもが奪われた。

しかし、マスコミの統制された偏向報道によってほとんどの国民は人権擁護法が良い法律だと誤解したのである。

保守・右翼団体は殆どが地に潜り、一部は言論を革新的・左翼的な物に変更して『平和市民団体』の偵察と監視を行った。

そして、この日彼らは『日本奪還』のための武器調達にこの浅間山まで赴いたのである。

そしてあの少女は武器調達実行部隊の副隊長、吉野秋菜その人であった。

容姿が子供なのでとても活動家には見えない、とよく言われるが、実際は強烈な反共主義者で、小学生の頃から過激な発言を繰り返しては教師の顰蹙を買っていたと言う経歴の持ち主である。

ちなみに中年の男の方は武器調達実行部隊の隊長にして保守・右翼団体『日本愛国者連合議会』の議長である高橋嘉弘だ。

こちらも四十二歳で組織を纏めているのだからかなりの大物である。

彼らの目的は、自衛隊武器廃棄施設に潜入し、発見されずに武器弾薬を持ち帰ることだ。

その際に最大の脅威、問題点となるのは施設内部に大量設置された監視カメラである。

カメラと、高圧電流柵をかい潜るために講じた策。

それは雷雨の夜に落雷を装って停電させることだった。

雷雨の日なら停電しても雷が落ちたと思わせる事が出来る。

真夜中ならば警備は少ないし『落雷』の目撃者が出る可能性は低い。しかし、これでもまだ一つだけ問題があった。

廃棄施設には自家発電装置が存在する事だ。

自家発電装置が動き始めるのは停電から丁度十五分後。それまでに施設に潜入し、武器弾薬を外に運び出さなければならぬ。

トラックで搬入口から侵入する予定だが、搬入口付近には十数個の監視カメラが設置されており、一瞬でも脱出が遅れた場合確実にトラックのナンバーが記録されてしまう。そもそも、この施設に誰かが侵入したと言うことがばれるだけでも致命的なのである。

失敗は即、命取りとなる。

そのため、武器調達実行部隊の殆どは元自衛隊員、それも特殊作戦群や第一空挺部隊などの精鋭で固められている。『落雷』の実行部隊は電気の専門家やエンジニアで構成された。

これが失敗すれば、その後の計画は全て頓挫してしまうのだ。だからこそ、万全の態勢かつベストな日時を選択し、出来る限り失敗の可能性を下げたのである。

彼らは武器の奪取が犯罪だと知っている。

彼らに罪悪感が無い訳ではない。

しかし、手段を選べる状況では無かったのだ。愛する祖国を守るために。

捕まる訳にもいかない。

捕まれば芋づる式に他の活動家にまで危害が及ぶ。

そうなれば、もはやこの理不尽かつ不自由な状況を打開しようとする人間は消え去り、日本は中国の属国……いや、直轄領となる。

中国の直轄領となる事を防ぐには力が必要だった。

言論はもはや打ち捨てられた。

残るものは、自然が生み出した力のみ。

この状況を打開するために、あらゆる方法を使う必要があったのだ。

彼らは最初に集った時に決めていた。

日本が正常な姿に戻った時、それまで行って来た非合法的手段の罰を受ける、と。

それが法治国家としてのあるべき姿だと。

そして、覚悟を決めた人間による、最期の抵抗が始まる。

第一章 崩壊 第1話 武器廃棄施設（後書き）

誤字・脱字の指摘や評価・感想などお待ちしております。

第2話 武器奪取

「3、2、1……OKです。施設は停電」

嘉弘や秋菜の隣で電圧制御装置をいじくっていた技術者風の男が小さな声で言った。

「分かった。入るぞ。トラックはすぐそこにある。偵察班を除いて全員乗車」

嘉弘は左を指差しながら言った。

そこには宅急便の大型トラックが2台とクレーン車1台が停まっている。

嘉弘の後ろにいた隊員たちは小走りで一番前に停車しているトラックに乗り込んだ。

嘉弘と秋菜はトラックの運転席と助手席に乗り込む。

トラックの真正面には、ぱっと見では外周を囲んでいる高圧電流柵と全く同じにしか見えない程巧妙に隠蔽された裏口がある。

管理者はいくらなんでもここまで隠せば分からないだろう、監視カメラなどを付ければそのせいでむしろここに裏口があるのがバレてしまう、とでも考えたのか、ここだけ監視カメラが設置されていなかった。

この裏口が何故作られたのかは不明だが、彼らにとってはどうでも良いことだった。

偵察班が裏口の鍵を開け、扉を開くと同時にトラックが廃棄場内に滑り込んだ。

トラックは無灯火で静まり返った廃棄場を疾走する。

予定では停電から3分で武器が廃棄されている場所に到着することになっていた。

「高橋さん」

秋菜が運転中の嘉弘に話しかける。

「ん？ どうした」

「いくらなんでも、おかしくないですか？」

「確かに。ここまで来て、一度も警備を見てない。夜勤の警備員が4人いるって言う情報は一体どうなったんだ？」

実際、見つからないのがベストだと言っても、トラックの騒音で気付かれる恐れもあったし、夜勤の警備員がいることも把握していた。しかし、これまで一人も警備員を見かけていない。

ただ単に停電から時間が経っていないからなのかもしれないが、秋菜は妙な胸騒ぎがしたのだ。

ここではない、別の場所でもんでもない事が起こっているのでは無いか、と。

「しかし、警備員に見つからないなら万々歳だ。帰りも騒がしくならなくて済みそうだしな」

嘉弘の言葉で秋菜は元の精神状態を取り戻した。

今は当てにならない直感に頭を悩ませている場合は無い、この作戦が成功しなければ終わりなんだと。

結局、見張りに気付かれる事なく搬入口から内部へと侵入し、武器の廃棄場所へと到着した。

「うわあ、すごい……」

秋菜が驚くのも無理は無い。

そこは、まさしく『武器の墓場』と形容するに相応しい場所であったのだから。

長さ10メートル、横8メートル程の巨大な浴槽の中には89式小銃や64式小銃、M-2重機関銃やミニミ軽機関銃、01式軽対戦車誘導弾（携帯型対戦車ミサイル）、91式携帯地对空誘導弾、M-26破片手榴弾などその弾薬が溢れんばかりに詰め込まれていた。

もしもこの場所で火災でも起きた暁には、確実に施設が吹き飛んでしまうだろう。

しかし、驚いている場合では無い。時間は限られているのだから。

「急いで武器をトラックに積み込め。早くしねえと時間が切れちま

う」

嘉弘がトラックから降りた隊員たち少し苛立ったような口調で言った。

隊員たちは了解すると一番後ろにあるクレーン車に向かうグループと2台目のトラックで待つて詰め込み作業を手伝うグループ、手作業で武器をトラックに積み込むグループに別れた。

このクレーン車、実は強力な電磁石がクレーン部分に付けられており、一回で大量の武器弾薬を吊り上げる事が可能になっていた。

それ以外にクレーン部分に大きなカゴを結わえ付けて武器を掬い上げる方法もあった。

それを併用すればどうか、との意見が出たため、電磁石とカゴを併用することに決まった。

そして、1度で65丁前後もの銃を吊り上げる事が出来た。

作業時間たった7分で1300丁もの銃を吊り上げ、武器を手作業で積み込むグループは弾薬を運ぶ事しか出来なかった。

つまり、初の作戦で彼らは大成功を収めたのである。

帰りも警備に見つかる事も無く、今日は何事も無い、と思った矢先、トラックへ無線が入った。

『政府が、日米安全保障条約を破棄し、日中安全保障条約を締結した』と。

第2話 武器奪取（後書き）

誤字・脱字の指摘や評価・感想お待ちしております。

第3話 日中安全保障条約締結

「一体どういう事なんだ!？」

先程の無線連絡から2時間後。

嘉弘や秋菜たちは当初予定していた東京の高尾山にある『救国連合（全国の保守、右翼、民族派団体の連合体で日本最大の反政府団体）』のアジト兼地下倉庫への帰還を取りやめ、長野県上田市の『救国連合』第3諜報部に來ていた。

目的は勿論先程の無線の真偽を確かめるためだ。

「無線で連絡した通りです。総理大臣は昨日15時頃、電撃的に中国を訪問、中国首脳と会談を行った後に日中安全保障条約に調印、直後に日米安保条約を破棄しました。動きは前から掴んでいたのですが、あまりにも早い締結で、東京の第1諜報部は大混乱に陥っています。それと、米海軍の原子力空母と護衛艦が危うく海上保安庁によって拿捕されるところでしたが、なんとか脱出出来た模様。さらに、本日中にも中国の第2空挺軍が厚木に到着するようです」「なんてこった……」

嘉弘は失望をあらわにしつつ、状況の打開策を考えはじめる。

政府に申し入れるのは無意味だ。

現政府は完全に中国の犬と化している。

街頭演説などすればたちまち人権擁護委員会の餌食となってしまう。

また、街頭演説はたいした意味を持たない。

何故なら日本国民の殆どが右翼・保守系団体を暴力団の類似品だと考えているからである。

そこで、一つの案が浮かんだ。

中国の太平洋進出を快く思わない国家の助けを借りるのだ。

筆頭は勿論アメリカ合衆国だ。

日本と言う防波堤が消滅して最も困るのはこの国である。更に言えば、日本の技術力と経済力が中国に加わる事は旧西側国家自体の存

亡の危機となる。

次にロシア。

ロシアと日本の間には北方領土問題があるが、基本的にロシアにとって最大の敵とは中国である。

また、日本を中国に占領された場合日本海にあるほぼ全ての港が中国によって閉鎖されると言う危険も出てくる。

この両国の助けを借りつつ、現政府への反乱を起こすのだ。

しかし、両国の支援を受けられたとしても最大の問題が立ちはだかる。

中国の空挺部隊だ。

恐らく反乱を聞き付ければ喜々として鎮圧行動に乗り出すだろう。

日本の警察が暴動の鎮圧のために行った放水などという手法は取らず、全員を射殺しようとする可能性が高い。勿論こちらにも先程盗んで来た武器があるが、自分達は所詮1民間人。

しっかりと訓練を受けた本物の兵士には敵わない。

元自衛隊員もある程度はいるが、中国お得意の人海戦術が使用されれば全滅の憂き目に遭うことは間違いない。

もしもアメリカが兵士の支援を行ってくれるならば話は別だが、それでは日本が米中戦争の舞台となって国土が荒廃してしまう。

それに、下手に兵士の支援を受けてはアメリカの51番目の州となってしまう可能性すらある。

ロシアの場合も属国化は免れないだろう。難しい問題だった。

と、ここで秋菜が口を開いた。

「高橋さん。『救国連合』の緊急総会の発動を進言します」

この問題は国家の運命を左右するもので、嘉弘だけで決められる事でも無かった。

ならば、右翼・保守・民族派団体の最高意志決定機関である救国連合総会にて今後の方策を練るべきだ、という意味だった。

「……そうだな。『救国連合』の緊急総会発動権限を行使する。理事たちに緊急通達を出してくれ。開催場所は東京都港区の『救国連

合』本部だ」嘉弘は謀報部の通信要員に向かって言った。
「了解しました」

通信要員は答えるとすぐに無線機をいじり始めた。

「よし、東京に行くぞ。車を用意してくれ」

第3話 日中安全保障条約締結（後書き）

誤字・脱字の指摘や評価・感想お待ちしております。

第4話 救国連合緊急総会

「やはり、中国軍の到着と同時に決起するのがいいのでは？」

「いや、それでは全滅は目に見えている。暫く潜伏し続け、米露の支援を取り付けてから決起するべきだろう」

「それでは手遅れだ。その間に中国は日本を対米の前線基地にしている」

「かと言って、今決起するのは時期尚早だろう。まだ武器や兵員の準備が出来ていない」

「しかし、3ヶ月もあれば日本は中国に併合され、天皇陛下は処刑されてしまう」

会議は紛糾していた。

中国軍の兵員規模が不鮮明な上に突然の安保締結だったため、『救国連合』の足並みは乱れていた。

即座に行動を起こして総理大臣以下閣僚を抹殺すべしという意見、暫く潜伏して米露の支援を取り付けてから中国排斥を行うべきという意見で対立し、会議の行方は全く分からなくなっていた。

どちらの意見も正論だったからだ。

今すぐに動けばまだ間に合うが、潜伏した後には動けばその時点で手遅れになっている可能性は高い。

しかし、現在、武器は小火器しかなく、兵員の数も少ないため、すぐに動けば全滅する可能性は高い。

反面、米露の支援を受ける事が出来れば戦車さえもを入手出来る可能性はある。

非常に難しい問題だった。

武器を手に入れても手遅れの可能性があり、今すぐ動けば全滅する可能性が高い。

これでは決まる訳が無い。

と、ここで、これまで沈黙を守っていた『救国連合』創設者であり、『救国連合』最高齢（78才）の赤井直茂が口を開いた。

「一つだけ方法がある。動かず、潜伏するよりも行動的で、全滅する危険性が低い方法が、な」

「それは一体？」

双方から疑問の声が上がった。

「ゲリラ戦じゃ。あの方法を使えば、被害を最小限に抑えつつ、米露の支援を待つ事が出来る。最大にして最悪の問題は、民間人に被害がでることじゃが」

確かにゲリラ戦は効果的かつ兵員への被害が少ない。

しかし、ゲリラ掃討戦を発動された場合、周辺住民が皆殺しにされる。

それは最悪だ。

『右翼団体憎し』の風潮になった場合、国民を敵に回してしまう。

マスコミは率先して煽るだろうし、遺族は怒る。

そのような事になった場合支援者は減り、『救国連合』は消滅してしまう。それは絶対に避けたかった。

「私は支持します」

ここで、秋菜が爆弾発言を投下した。

『救国連合』の殆どの理事はゲリラ戦術を取りたく無いと考えている。

そもそも秋菜は緊急総会発動権限を持つておらず理事のポストでも無い。

嘉弘の副官として出席しているため発言権すら無かった。「発言権も持っていない小娘風情が発言しようとする……」

理事の一人が声をあげようとした所を直茂が遮った。

「いや、よい。どう言う事かね？」

その言葉に、秋菜は自信満々の顔になりながら言った。

「地上でのゲリラ戦には私も反対です。中国軍が日本人に対して手加減するとは思えませんから。ですが、自衛隊が存在した頃、最も

強力なのは一体何処でしたか？ 海上自衛隊です。航空自衛隊も十分強力でしたが、海上自衛隊はその上をいつています。私は、海でのゲリラ戦を提案します」

「海でのゲリラ戦？ 海賊と言うことか？」

別の理事が尋ねた。

「いいえ。そうでは無く、入港しようとする中国軍艦艇を片っ端から撃沈するのです」

「撃沈？ どうやって撃沈するのだ。我々は小型のクルーザー位しか持っていないぞ」

『救国連合』は殆ど水上戦闘能力を保持していなかった。

艦艇は維持費がかさむ上に本体価格も高いからだ。

とてもでは無いが中国の艦を撃沈出来る程の戦力は持てない。

「私の知り合いが最近、長崎県にある軍艦島の沖側でむらさめ型護衛艦が1隻放置されているのを見たそうです。怪しいと思って近付いて見れば、海自の制服を着た人がなによりよく分からない作業をしていたと言っていました。それを使えば、東京湾付近での待ち伏せ攻撃が可能になると思われます」これには理事たちも息を飲んだ。これまで廃棄されたのか解体されたのかすら分からなかった海自の艦船の在りかが判明したのだから。

理事たちは顔を見合わせ、頷くと、直茂が代表して言った。

「これからの作戦の最重要目標は長崎県端島（軍艦島の正式名称）に放置されたと思われるむらさめ型護衛艦の接收、又は戦力化である。総会はこれにて終了。次回総会は10日後の午後2時より」

そう言うとき直茂は会議室を出ていった。

それとほぼ同時に他の理事たちも立ち上がり、会釈した後会議室を後にした。

第5話 軍艦島

「完全に廃墟になってるわね……」

秋菜は5人の供を連れて軍艦島に上陸していた。

今回は秋菜が言い出した事のため、上陸グループの隊長に選ばれたのだ。

軍艦島は廃坑になった炭鉱で、1970年代まで人が住んでいたが、それから殆ど人が入っておらず、建物も大半が老朽化しているため、上陸禁止措置が取られている。

また、あまり大きな島でも無いため本当ならむらさめ型護衛艦のあるポイントまで船で行く予定だったのだが、何故か目撃ポイントに存在せず、と言うより軍艦島周辺にも存在しなかった。

とは言っても、写真があるため最近まで停泊していた事は間違い無かった。

何らかの理由で他の場所に移動した可能性があると考え、一度上陸してみる事になったのだ。

罨だった場合に備え、上陸グループは全員完全武装で軽機関銃まで持って来ていた。

しかし、1番の問題はそんな事では無く、老朽化し、今にも倒壊しそうな建造物であった。

小さな島に最盛期は5000人を越える人間が住んでおり、最盛期の人口密度は東京の9倍だったのだから、建造物も密集していて、倒壊すれば逃げ場は全く無かったのだ。

「隊長。これを見て下さい」

廃墟化したアパートを搜索している最中、隊員が秋菜を呼んだ。

「何か見つけたの？」

「はい。どうやら日記のようです。それかなり最近の物と思われます」

隊員は秋菜にその日記を手渡す。

確かに、埃も殆ど被っておらず、つい最近の物であることは間違いなかった。

秋菜は日記を受け取ると、パラパラとめくり始めた。一通り読み終わると隊員に日記を返しながら言った。

「どうやら、幹部自衛官が書いた日記みたいね。3日前に目的の護衛艦は出発したみたい」

その日記は元海上自衛隊3佐が書いた物で、停泊していたのはむらさめ型護衛艦4番艦・きりさめだった事が判明した。

そして、自衛隊解体後、色々な造船業者の手を借りながら元自衛官（乗組員）たちで保守管理を行っていたらしい。

幾度か海上保安庁によって船が捕捉されて、青森、佐渡島、隠岐、境とあちこちを転々として、この島に行き着いたらしい。

また、日記の最後には『3日後に国家公安委員会特殊作戦部隊がこの島にやってくるらしい』と書かれており、その特殊作戦部隊から逃げるためにどこかへ行った可能性が高くなった。

そして、ここで重大な問題が発生した。

「どうしよう……今日だよ。日記の3日後って……」

そう。この日記に書かれた日付は今日から3日前。

つまり、この特殊作戦部隊が来るのは今日なのである。

このままでは自分達が捕まえられてしまう。

秋菜は即刻撤退を決意した。

早くしなければそれだけ捕まる可能性は高くなる。

だから、急いで撤退しなければならない。

「こちら上陸部隊。非常事態発生。本日この島に公安委員会の特殊部隊上陸の可能性あり。至急船を回されたし」

秋菜は無線機を手に取るとかなり速い声でそう言った。

直後に無線機からノイズ混じりの声が聞こえてきた。

『こちら船上部隊。船を回せない。現在本船は海上保安庁の巡視艇による攻撃を受けている。遠慮なく射撃して来るせいでかわすのが

精一杯だ。ミサイルもスピードが速いせいで撃てない。一応本部へと連絡を取るが、最低でも30分はかかる。次の連絡まで待機され
たし』

秋菜は無線機を切った後、隊員たちに言った。

「これから島の西岸に向かうわ。もしも西岸に到着して30分以上が経過すれば泳いで本土（九州）まで向かうわ。海保がいると言うことは公安の特殊作戦部隊とか言う奴らも近づいているはず……」
そう言っているうちに遠くからヘリコプターのローターが回転する音が聞こえてきた。

「日記を持って、急いで西岸まで向かうわよ！ 銃に弾を装填して
！」

秋菜が叫ぶと、隊員たちは小銃や機関銃を取り出して弾薬を装填した。
た。

全員が銃を用意したのを見ると、秋菜は西へと駆け出した。

第5話 軍艦島（後書き）

誤字・脱字の指摘や評価・感想お待ちしております。

第6話 脱出

秋菜たち上陸部隊は必死に走っていた。

理由は勿論公安特殊作戦部隊による追撃である。

住宅などが密集している地域のため、容易に発砲する事は出来ないし、そもそも発砲すれば倒壊しそうなビルも幾つかあるためただ逃げ回る事しか出来なかった。

公安の特殊作戦部隊は射撃精度もあまり良くないし、動きがぎこちなかった。

秋菜はこの部隊が初の実戦だと考え、ゆさぶりをかける事にした。

「適当に弾をばら撒きながら後退するわよ！ 絶対に柱に弾を当てないで！」

隊員たちは秋菜の指示に従い、屈んで後退しつつ89式小銃を乱射した。

乱射とは言っても、指示の通り絶対に柱には当てなかったし、何発か撃つごとに弾着に微妙な修正を加えているためフルオートにしては精度は高めだった。

その弾幕によって公安特殊作戦部隊は一度後退した。

ちなみに着弾は20発程度で一人が即死、6人が重軽傷を負った。

だが、それほど動揺した様子も無かったため秋菜は自らの予測が外れた事を知った。

しかし、公安部隊を一時的に後退させたのは紛れも無い事実だった。

「急いで！ 今のうちに西岸に向かうわよ！」

秋菜は叫びながら廃墟化したビルの中へ入っていった。

そこを通り抜けて50メートル程度で西岸に到着するのだ。

隊員たちも秋菜に続いて次々とビルへと入って行く。

これで公安部隊の追撃を振り切れる。

そう思った瞬間、ビルにロケット弾が飛び込んだ。

この時使われたのは旧ソ連の対戦車ロケット・RPG-7だった。

戦車を破壊する事を考えて製造された成形炸薬弾は老朽化したビル
の柱を食い破り、崩壊させた。

公安部隊はビルもろとも秋菜たちを圧死させるつもりだったのだ。
先程のぎこちない動きや命中精度がとてつもなく悪い射撃などは恐
らく秋菜らをここに誘い込むための演技だったのだろう。

何故なら命中精度が低いRPG-7を柱へピンポイントで叩き込め
るのなら通常射撃の精度が低いのはまずありえない事だからだ。

秋菜は自分の重大な読み違いに唇を噛みつつ、残された僅かな時間
で状況の打開策を考える。

あと10秒もあれば岩の津波は自分達を飲み込み、ミンチにするだ
ろう。

ここで、階段が見えてきた。

そして、秋菜は打開策を発見する。

現在崩れているのは1階の柱であって、ビル全ての柱が崩れている
訳では無い。

そして、1階が崩れれば2階は1階に変わる。

つまり、降りられなくなる可能性は無くなるのだ。

1階崩壊の影響で近いうちにビル全体が崩壊することは間違いない
だろうが、少しは時間的猶予を作る事が出来る。

そう考えた瞬間、秋菜は叫んでいた。

「急いで2階が上がって！」

隊員たちは全員揃って『了解』と叫ぶと一斉に階段を上り始めた。

秋菜たちが2階に上がった直後、津波は階段を薙ぎ払い、破壊した。
そして轟音を立てながら2階は1階へ沈み込んでいった。

音が止むと、秋菜や隊員たちは大きな溜め息をついた。

「後は西岸に行くだけよ。公安は私たちを殺したと思っているでし
ょうから、もう攻撃される事は無いと思うけど、一応警戒態勢をと
っておいて」

秋菜はそう言うのと西に向かって歩きはじめた。

もう、襲撃されることは無いだろうと安心しながら。

3分後。

秋菜たちはビル之最西端に到着していた。

1階が崩落したため瓦礫だらけで段差はあつて無いような物だった。

「こちら上陸部隊。西岸に到着。脱出船はまだか？」

秋菜は無線を手に取ると非常に聞き取りにくい早口で言った。

直後に船上部隊からの返信が入る。

『あと5分あれば到着する。しかし、それよりも上を見た方がいい。ブラックホークだ。ミニガンを装備してる。急いで逃げないと蜂の巣にされるぞ』

秋菜ははつとして頭上を仰ぐと、そこにはUH-60ブラックホークと銃口を秋菜たちにむけるM-134ミニガンの姿があった。

ミニガンは毎分6000発から4000発の7.62ミリ弾を吐き出すガトリングガンで、その発射速度から痛みを感じないまま死ぬ銃、『無痛銃』とよばれている。

毎分6000発と言うことは毎秒1000発の弾丸の嵐。

早く逃げなければ一瞬で蜂の巣になってしまう。

秋菜は叫ぶ事も忘れてビルへと駆け出した。そこなら一応の遮蔽物が存在する。

救出部隊が来るまでそこで持ちこたえればいいと考えたのだ。

他の隊員たちもそれぞれ遮蔽物となりそうな場所へ駆け出した。

秋菜たちが隠れ終わる直前、ミニガンは弾丸の嵐を射出し始めた。それによって隊員の一人が蜂の巣にされた。

秋菜たちは、ただ救出部隊の到着を待つのみだった。

第6話 脱出（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘や評価・感想お待ちしております。

第7話 ブラックホーク

最初の嵐から2分が経過した。

現在ミニガンは銃芯冷却のためになりを潜めている。

一時的な休息の時間、秋菜は水を飲みながら考えていた。

遮蔽物は無くなってしまったのだ。

ミニガンの射撃速度の前では老朽化した建物の壁では防ぎきれない。既に壁には無数の穴が空き、次の嵐では使い物にならないのは明白だった。

対空ミサイルも持っていないためブラックホークの撃墜は不可能だ。隊員たちの進言があったのに『ただ調査に行くだけだから必要無い』と言ったため持ってこなかったステインガー地対空ミサイル。

あの言葉を言った自分を殺したくなかった。

隊員の1人が死んだのは自分のせいだ。

ステインガーを持って来ていれば、ブラックホークを撃墜出来て、隊員が死ぬ事も無かった。

自分のせいだ。

しかし、そのような事を考えても仕方が無い。

過ぎ去った時間を戻す事は出来ないのだから。

秋菜はまずミニガンを無力化する方法を考え始めた。

ブラックホーク撃墜は不可能でも、ミニガン単体の撃破は可能だと思ったからだ。

ミニガンを無力化する方法は幾つかある。

まず、銃口に小銃弾を叩き込みミニガンの弾薬に誘爆させるもの。

しかし、銃口は小さいため小銃弾が入る可能性は低い。

次に、ミニガンのバッテリーパックを破壊する方法。

ミニガンは作動のためにかなりの電力を必要とする。

その電力源であるバッテリーパックを破壊すれば使用は不可能だが、そのバッテリーパックが何処にあるかが分からない。

最後はガンナーの狙撃。

簡単に見えるが、一番難しい。

まず、スコープ付の小銃が1つも無い事。

スコープが無ければ狙撃は難しい。

そして、ガンナーは機内の他の人間が務める可能性があることだ。

つまり、1人倒しても他の人間が出てくるのだ。

ガンナーが代わって居場所がばれれば終わりだと言うことだ。

ここで、一つの方法を思い出した。

ブラックホークの撃墜は不可能だと思っていたが、一つだけ撃墜する方法がある。

それは、ローターの破壊だ。

ローターを破壊すればヘリは飛ぶことが出来ない。

軍用ヘリだと言うこともあって、ローターは何発かの銃弾の直撃に耐えうるようになってるが、全方向からの射撃には耐えられないだろう。

それに、ブラックホークがいる場所は超低空で、銃弾の威力が弱まる前に着弾する。

ただ、本当に撃墜出来るか分からない。

この小銃にはグレネードランチャーは装備されていない。

もしもグレネードランチャーがあれば全ての作戦を同時に行う事が出来た。

持つて来なかったばかりに、こんな事になってしまった。

「皆。よく聞いて。これから私たちはブラックホークを撃墜するわ。私の合図と同時に全ての火器をブラックホークのローター部分に集中させるの。本当に撃墜出来るかは分からないけれど、なんとか撃墜しないと私たちは全員蜂の巣にされる。いまからブラックホークを狙える場所に向かって。出来れば下と上から同時に攻撃をかければいいんだけど、上昇されたら終わりだから、どこでもいいわ。それぞれ連絡を取り合って十字砲火になるように調整して。以上、通信終わり」

秋菜は無線機を手にとって隊内用の周波数に合わせた後、隊員たちに命令を下した。

それから30秒後、配置完了の通信が入った。

後はブラックホークがやってくるのを待つだけだ。

ブラックホークの機体は見えているが、中々こちらに来る様子がない。

再配置の命令を下そうとしたその時、ブラックホークがこちらに向かって来るのが見える。

爆音を響かせながら、秋菜たちが待伏せている場所へ……入った。

「射撃開始！ 弾切れまで撃ちまくって！」

秋菜も小銃を構えると、セレクターレバーをフルオートに合わせて引き金を思い切り引いた。

物凄い反動と共に89式小銃の5.56ミリ弾が発射されていく。

他の隊員たちも一斉に射撃を開始し、ブラックホークのローターに大量の銃弾が着弾する。

ブラックホークの操縦士が慌てたのか、ブラックホークは右へ左へ極端な振動を始めた。

そのせいでミニガンも照準を合わせられずに発射不能となって戦闘能力を失った。

残ったのは死にかけの黒い鷹。

秋菜たちは更に銃火を多くするが、止めを刺したのは秋菜たちでは無かった。

ステインガーマサイルだ。

ブラックホークはコントロールを失って大きく後退しながらかつて病院だった廢墟に墜落した。

その上からやって来たのは『海上自衛隊』の文字と日の丸が描かれた白い機体、SH-60K・シーホークだった。

第7話 ブラックホーク（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

第8話 シーホーク

ゆつくりと降下して来たSH-60K・シーホークから一人の男が顔を出しながらローターの爆音に負けない程の大きな声で言った。

「岸に降りる。降りたら君達も乗ってくれ。少し話がしたい」

男が顔を引つ込めるとシーホークは岸へと向かっていった。

「恐らくあのへりは味方よ。だから、岸に向かって」

秋菜は無線で隊員たちに命令を下したあと、安堵の息を吐いた。

横にある89式小銃の残弾数は6発。

もしもあのステインガーが無ければすぐにミニガンが駆動を開始し、秋菜たちは全滅していただろう。

秋菜は小銃を手に取ると、岸边へと向かった。

岸ではシーホークがローターを回転させながら着陸していた。

シーホークから先程の男が出て来て、会釈した後言った。

「私は旧海上自衛隊第3護衛艦群第7護衛隊所属護衛艦きりさめ副艦長の佐竹信宏二等海佐です。我々は現在公安委員会に追撃を受けている身ですが、貴方がたは一体何者です？ 銃も持っているようですし、一般市民ならば公安と銃撃戦をやらかそうなんて事はしない」

秋菜はかなり20代後半に見えるこの男の階級の高さに驚きつつもその質問に答えた。

「私は日本愛国者連合議会副議長で救国連合の副理事（発言権無し）の吉野秋菜です。我々は本日ここに放棄されたむらさめ型護衛艦の接收に来たのですが、なぜか島周辺に停泊しておらず、帰還しようとした時に公安の襲撃を受けやむなく応戦、脱出のため西岸に来た時にあのブラックホークの襲撃を受け隊員1名が死亡しました。つまり、一般市民ではありません」

一気にまくし立てた秋菜にほっけながら、男……信宏は口を開いた。

「君が右翼団体として有名なあの日本愛国者連合議会の副議長だつて？　まだ高校生かその位だろう？」

「はい。今は高校2年生です」

「そんな事はどうでもよかったな。君達が探している艦は恐らく私たちの艦だろう。残念ながら放棄はしていないが、こちらもいろいろと厄介な連中に追われる身だ。共闘の交渉ならば応じる事が出来る。どうだろう？」

信宏が話題ずらしを図ったのは明らかだったが、秋菜としても年齢の話などどうでもよかったので話題ずらしに応じた。

「分かりました。共闘の交渉を行いましょう。ですが、その前に少しお願いしたい事があるのですが」

「何だ？　我々に出来る事ならば手伝おう」

「私たちの仲間が乗る船が海上保安庁の巡視艇に追われています。このヘリについているヘルファイア（空対艦ミサイル）で撃沈するか、追い払って貰えないでしょうか」

信宏は若干考えるような仕草をした後、了承した。

「分かった。ドアガンで追い払ってみよう。さすがに海自の兄弟にミサイルを撃ち込むことは出来んからな。では、乗ってくれ。我々の城へと案内しよう」

「分かりました。皆、乗り込んで」

秋菜が命令すると、人員輸送用に装備が取り外された機内に隊員たちが乗り込んでいった。

最後に秋菜が乗り込むと、扉を閉める。

俄にローター音が大きくなり、シーホークはゆっくりと空へ舞い上がった。

シーホークは沖に向かって旋回すると、機体を前に傾斜させ、進みはじめた。

「こちら上陸部隊。現在ヘリでこちらに向かって移動中。巡視艇の様子はどうか」

秋菜は無線の周波数を船上部隊の物に合わせて、言った。

『へりだつて？　どここのへりだ？』

「海上自衛隊のSH-60K。それよりも巡視艇は？」

『現在も追撃を受けている。ただ、弾の節約を始めたから弾切れが近いと思う』

「分かった。今そっちに向かつてる。あと1分程度で到着する」

『もうへりの音が聞こえてる。どうかこの巡視艇を追い払ってくれ。通信終わり』

こうして無線が切れた。

あとは巡視艇を追い払うのみだった。

「間もなく威嚇射撃を開始します。ただ、反撃を受ける可能性があるのだからシートベルトを締めておいて下さい」

信宏が言った。

秋菜や隊員たちは既にシートベルトを締めているため、新たな動きは無かった。

一瞬の静寂が機内を包む。

「射撃準備」

信宏の声と共に扉が開かれ、ガンナーがドアガンである7・62ミリ機銃を構え、照準を合わせる。

「射撃開始」

同時に機銃が火を噴いた。

銃弾は巡視艇の後部に集中して着弾し、巡視艇は機銃を避けようと蛇行運転を開始する。

それに対してシーホークは執拗に接近を試み、形勢不利と見たのか、巡視艇は大きく右へ旋回すると長崎市方面へと逃亡して行った。

『ありがとう。これで我々も自由に動けるようになった。我々はこれから対馬付近の母船へと向かう。しばらくは母船もそこに停泊しているだろうから、交渉が終了すれば母船まで帰って来てくれ。以上、通信終わり』

船上部隊からの連絡が終わった後、へりは沖合へと向かって行った。

第8話 シーホーク（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘や評価・感想お待ちしております。

第9話 護衛艦『きりさめ』

巡視艇を追い払ってから25分後。

シーホークは護衛艦『きりさめ』の後部甲板に着艦していた。

秋菜たちが降りると、『きりさめ』乗組員たちは敬礼で迎えた。

「艦長はどこだ？」

信宏は乗組員の1人に尋ねる。

「艦長なら艦長室でお待ちになっております」

「そうか。皆さん、艦長室に案内します。私について来て下さい。

それと、艦内には段差や障害物が大量にあるので気をつけて下さい」

信宏は言うや否や早足で艦内へ消えていった。

それを見て秋菜たちは慌てて信宏を追いかける。

艦内に入って10分が経過した。

食堂や下士官室を通り、幾つか階段を上ったところに銀板に黒字で

『艦長室』と書かれた部屋があった。

「ここが艦長室です」

信宏は言いながらノックをした。

「……入れ」

中からとてつもなく低い、くぐもった声が聞こえてきた。

「入って下さい」

信宏はそう言うのと艦長室の扉を開いた。

中にいたのは52、3の髭を生やした男だった。

「佐竹。なぜこんな子供がいる。お前が連れて来るのは日本愛国者連合議会の副議長の筈では無かったのか？」

男は信宏を睨みつけながら言った。

「彼女が、日本愛国者連合議会の副議長であります」

信治は表情一つ変えずに言った。

「ふん。日本愛国者連合議会は中学校か高校の生徒会か？　こんな

小娘を……お前、どこかで見たような顔だな」

男は秋菜を見ながら言う。

しかし、秋菜にはこんな男と会った記憶など全く無いし、ここまで強烈な存在感を発揮するなら確実に覚えているだろう。

「見間違いではありませんか？ 私は貴方と会った記憶は全くありませんが」

秋菜は小娘と呼ばれた事への仕返しか、いらついたような声で答えた。

「いや、確かにどこかで会ったような気がする。あれはいつだったか……そうだ。お前、俊介の娘だろう。たしか6年前の花見の時に会った覚えがあるぞ」

その言葉を聞いて秋菜は思い出した。

この男は確か、永田孝一郎と言う名前で、今は刑務所に入れられている秋菜の父の元上司だった。

「永田孝一郎さん……でしたっけ？」

「そうだ。お前の名前は確か……」

「吉野秋菜です」

「今日は一体何をしにここに来たんだ？」

孝一郎の質問に秋菜は即答した。

「きりさめと我々の共闘交渉です」

「共闘？ 何に対する共闘だ？」

「中国の出先機関と化した日本政府と中国人民解放軍」

「どうやって戦う？」

「きりさめによるミサイル攻撃で中国海軍の艦船を襲撃する。私たちは地上で主要人物の暗殺を行う」

主要人物の暗殺はゲリラ戦論争になる前から決定されていた事だった。

「ならば、何故戦う？」

予想外の質問にしばし思索した秋菜だったが、自分としての意見を包み隠さずに言った。

「……このままでは日本は中国に侵略され、日本人の安息の地は無くなってしまふから。それと、自由のため。左翼の言論は批判されるどころか賛美され、右翼の言論は徹底的に攻撃されて言論の自由が適用されないから。これじゃあ北朝鮮と全く変わり無い言論弾圧・思想統制国家だと思ったからです」

「では、その戦いの中で死ぬ覚悟はあるか？　これまで何人もの保守派知識人が投獄され、処刑されている。そのように惨めに死んでいく覚悟はあるか？」

「あります。ですけど、私たちは生きるために戦うのであって死ぬために戦うではありません」

秋菜の言葉に孝一郎は頷くと、いきなり結論を出した。

「いいだろう。共闘を受諾する。お前たちがただ反政府のために戦っているのならば拒否しようと思っていたが、どうやら違うようだ。具体的な話はこれから数日かけて行ふ事にしよう。だが、その共闘の内容があまりにも我が艦を捨て身にした作戦ならば『きりさめ』艦長としてこの話は無かった事にさせてもらおう」

いきなりの結論に驚きつつも、交渉がうまくいったことへの喜びを感じながら秋菜は言った。

「それでいいでしょう。我々も一度本部へ帰って報告をしなければなりません。もしよければシーホークで対馬沖の母船へと送って頂けませんか？」

「いいだろう。だが、一つ頼みを聞いてくれないか？」

「何ですか？」

「俺の家に行つて、息子をここまで連れて来て欲しい。人質に取られては困るからな」

確かに、人質にとられる確率はかなり高いだろう。

逃亡護衛艦の艦長の息子と言う肩書ならすぐにでも人質に取られてしまふだろう。

「分かりました。家はどこにありますか？」

「長崎県佐世保市だが詳しい位置は連れ出す日になってから電話か

無線で伝える。もしも口が滑って公安のスパイに聞かれたら非常に困るからな」

「分かりました」

「母船まではヘリで送ってやる。佐竹、ヘリの準備をさせろ」

「了解です。艦長」

第9話 護衛艦『きりさめ』（後書き）

急用が出来たので日曜日の更新が出来なくなりました。
月曜日には更新する予定です、しばらくお待ち下さい。

第 α 1話 永田祐樹（前書き）

α は視点変更の意味です。

第α1話 永田祐樹

『昨日午後3時頃、世界遺産登録申請中の長崎県端島、通称軍艦島にて公安委員会のヘリコプターが何者かによって撃墜されました。直後に海上保安庁の巡視艇が旧海上自衛隊のマーキングがされたヘリコプターによって攻撃を受けていることから、警察はこのヘリコプターによる犯行の可能性が高いと見て捜査を進めています。ヘリコプターの乗員は11人中8人が死亡、2人が意識不明の重体、1人が下半身不随の重傷を負いました』

ニュースを聞きながら、永田祐樹は溜め息をついた。

「まさか親父の艦じゃ無いよな……」

彼は護衛艦『きりさめ』艦長である永田孝一郎の息子で、現在高校2年生だった。そして、自分の父親が護衛艦で逃亡を続けている事も、自分が公安に監視されている事も知っていた。

もしもこのヘリが父親の護衛艦のものだと言うことが分ければ、自分は確実に公安に捕らえられるであろう事も。

もしも公安が捕らえに来た場合、徹底的に抵抗する覚悟は前々からしていたが、この頃の公安は尾行や監視が露骨になっっている事は明らかで、抵抗すれば殺される危険性すら漂っていた。

それに、祐樹として見れば父親の行動によって捕まえられて嫌な扱いを受けるのは迷惑極まりない事なのだが、父親を慕っていたし、自分のためにも断固として抵抗しなければならなかった。

今日中に公安が来るかもな、と思いつつ祐樹は制服に着替え、家を出た。

出たのだが……後、前、右、左と四方八方から監視の目を感じる。中には明らかに殺気を漂わせている人物もいて、それが自分に向けられている事は明らかだった。

祐樹は一応だが中学時代剣道で全国大会に出場し、ベスト8まで入

っている。

殺気や監視の目を見つけるのはたやすい事だった。

向こうとしても、見つけられている事を前提とした行動のようで、撒かれないようにバックアップを大量に用意しているみたいだ。

すなわち、声掛けの時間は近い。

祐樹の得物はエアガンの拳銃と革製鞆、それに対して公安は本物の銃だ。

勝てる見込みはゼロ。

しかし、ただのエアガンであつても当たり所が悪ければ十分に凶器となる。

狙うべき場所はただ一つ。

目だ。

もしも当たれば失明するし、当たらなくても一時的に視界を奪う事は出来る。

電動ブローバック方式のエアガンだったので連射も可能だ。

だが、大問題がある。

もしも目を狙った事がばれれば逆上して射殺されないとも限らないのだ。

それではまさに本末転倒である。

それに、抵抗したとみなせば武器使用基準がゆるゆるの公安なら面白半分に撃つ可能性もある。

実際、アメリカで似たような事件は幾度かあつたのだ。

つまるところ、抵抗するのが正しい選択なのが非常に微妙なのである。

そもそも、子供が抵抗したところであまり意味があるとは思えない。そのような事を考えていると、尾行者から声を掛けられる。

「永田祐樹君だね？ 君の父親、永田孝一郎が内乱罪によって全国指名手配された。君の身柄を一時『保護』させてもらう」

男は『保護』と言ったが実際は逮捕・拘束に近いだろう。他の尾行

者たちは『抵抗するな』と拳銃で脅していた。

抵抗は不可能と見た祐樹が『分かりました』と言いながら振り向いた瞬間……男が左方向に吹っ飛んだ。

尾行者たちはなにがあったのか分からず困惑しながら拳銃を四方八方に向かつて乱射した。

しかし、拳銃で射撃を行った瞬間、その尾行者は吹き飛ぶ。

混乱した尾行者たちはもはや群れからはぐれた鰯でしかなかった。

あとはただ捕食されるのみ。

銃を向けていた尾行者たちも次々と吹き飛ばされて行き、大混乱に陥った尾行者たちは住宅街で実銃を乱射した。

通勤中のサラリーマンや通学中の学生たちが悲鳴を上げながら逃げ惑い、その場全体が修羅場と化した。

祐樹は未だに何が起っているのか理解出来ずに困惑していると、何者かに右手を引っ掴まれて引きずられて行った。

「な、何だ何だ？ 何なんだよ！？」

勿論、祐樹の頭は状況理解どころか？マークがただ旋回しているだけだった。

第α1話 永田祐樹（後書き）

本当は今日は更新出来ない予定だったのですが、少し時間が出来たので更新させて頂きます。それと、時間的に推敲が殆ど出来ていないので誤字・脱字、文法的におかしい点があればすぐに指摘してください。出来るだけ早く修正致しますので。勿論、評価・感想もお待ちしております。

第10話 救出と脱出

秋菜は走っていた。

……正確に言えば違う。

秋菜は一人の少年……祐樹を引きずりながら走っていた。

向かうべき場所は決まっていたが、尾行者……公安監視部隊によって追い掛けられているため中々その場所に行き着かない。

元々この追いかけっこはフェアでは無い。

秋菜が60キロ近くある大荷物を引きずりながら走っているのに対して、公安監視部隊の者たちは拳銃と自らの身体のみ。

秋菜とて味方の援護さえあれば公安の監視部隊ごときに遅れを取ったりはしないのだが、味方とはぐれていた。

途中で一本道を間違えたのだ。

恐らく味方は秋菜を探しているだろう。

そう遠くない未来に援護を受けられる事は間違いない。

しかし、この速度差では監視部隊に追い詰められる時間の方が早そうだった。

そもそも、鍛えているとは言ってもたかだか高校生の少女に自分の1.5倍近くの体重がある人間を運ばせる事自体が間違いなのだ。

まあ、作戦発動段階で最悪の状況だったため、秋菜が祐樹を連れて走っていなければ確実に祐樹は監視部隊に身柄を確保されていただろう。

予想された監視部隊の動員数は最大で30人。

しかし、実際はその3倍の90人。

最初の奇襲で20人は気絶させたものの、後詰め部隊が大挙して押し寄せてきたため場の完全確保を行う事も出来ず緊急撤退命令が出された。

それを受けもしもの時の為に用意されたテナントビルへ撤退を開始した。

そして現在の状況である。

拳銃で威嚇射撃をしながら必死で逃げようとするが、秋菜は目に見えて疲労していた。

服は水をぶっかけられたような大量の汗が染み込み、足は疲労で震えている。

予定ならば祐樹を案内するだけのはずだったが、連れ出して交差点を曲がった時に祐樹は電柱に衝突し、気絶していたのである。

秋菜は『早く起きてくれ』と心の中で叫びながら路地裏へと飛び込んだ。

その前後、祐樹の目が開いた。

「へ？」

そして、間抜けな声を出しながら路地裏の汚い地面にたたき付けられる。

そして数瞬後、拳銃を構えながら飛び込んできた2人の監視部隊員を秋菜は自らの持つ拳銃、ベレッタM92Fで射殺した。

その光景を見て祐樹は目を逸らした。

まあ、当たり前だろう。

人間が血を噴出しながら倒れていく様子を面白いと思う人間など殆どいない。

次に現れた監視部隊員も一瞬の内にして絶命した。

次も、次も、その次も。

そうして弾倉が空になるまで撃った時、路地裏の入り口にはそれまで人だったものが山になっていた。

秋菜は祐樹にポケットから取り出したオートマチック式拳銃を渡した。

その名前はシグ・ザウエルP220。

かつて自衛隊が採用していた拳銃である。

祐樹は驚愕の表情で秋菜を見つめる。

「本物よ。なんとかして脱出地点まで行くから、敵が出て来れば適当でもいいから撃ちまくって」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。一体何処に連れていくつもりなんだ？」

秋菜はよく考えれば何も言わずに祐樹を連れてきた事を思い出した。「言つのを忘れてたわ。私は貴方の父親、永田孝一郎さんの依頼で貴方を彼の艦に連れていく事になっているの。まあ、直行は出来ないから近くにある私たちのタンカーで乗り換えてからだけ。ちなみに言っておくと、もし奴らに捕まればまともな生活は送れなくなるわ」

「分かった。よく分からないけど、ついていく」
早くしなければまずいと言うことに気が付いたのか、祐樹は立ち上がった。

それを見た後、秋菜は『飛ばすわよ。絶対にはぐれないで』と言うと同時に疾風のように路地裏を脱出した。

追って来ていた監視部隊員に9ミリパラベラム弾を叩き込み、祐樹の手を取って走り出した。

止まることは無く、ただ走り続ける。

何人もの追手を打ち倒し、目的地であるテナントビルに到着したのは僅か2分後であつた。

味方部隊の隊員たちが秋菜を出迎える。

それとほぼ同時、テナントビルを黒い影が覆った。

敵部隊かと思つて顔を上げると、そこにあつたのはCH-47チヌーク輸送ヘリがホバリングしていた。

入り口から手を振っているのは少しの間別行動を取っていた嘉弘である。

ヘリはその場で旋回し、ビル屋上で乗り込む事が出来る場所へと移動した。

「そういえば、お前の名前は？ 俺の名前は永田祐樹、17歳だ」

祐樹が秋菜に聞いた。

「私の名前は吉野秋菜。今は16歳。3日後に誕生日よ……」
そう言うと同時に、秋菜は前にいた味方部隊員に倒れ込んだ。

「ただの疲労です。すぐに治りますよ」

駆け寄ろうとした祐樹に向かって隊員は言った。

「早く中に入って階段を上って下さい。近い内に敵が来ます」

隊員はそう言っていると、秋葉を抱き抱えながら祐樹の手を引っ張ってピルの中へと誘導した。

第10話 救出と脱出（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

第11話 中国軍上陸前夜1

秋菜が目覚めた場所は『救国連合』本部にある病室だった。起き上がろうとすると身体中が激しく痛む。

その時、横から声がかかった。

「起きては駄目よ。貴方は最近働きすぎだわ。使命感に燃えるのは結構だけど、自分の身体とも相談しないと」

秋菜が声の方向に頭を向けると、そこにいたのは白衣に身を包んだ20代後半と思しき女性だった。

秋菜はその女性と幾度か話した事がある。

彼女の名前は秋月加奈子。

防衛医科大学校の首席卒業生であり、現在は『救国連合』の衛生部隊隊長を務めている人物だ。

そして、秋菜にとっては命の恩人でもある。

「ですが、このままでは本当に日本はこの世の地獄となってしまう。それを防ぐことが出来るなら、私の身体がどうなろうと問題ありません。そもそも人手不足なのですから、私は他の方に比べればまともに仕事を出来ていません。軍艦島でのおおっぱいで派手な銃撃戦や救出作戦での不手際、この頃私は失敗ばかりです」

秋菜の言葉に加奈子は大袈裟な溜め息をついた。

「それは失敗では無くてミスって言うの。それに軍艦島の一件はそもそも想定外の事よ。それと、残念ながら日本がこの世の地獄になるのは避けられないわ」

加奈子はリモコンを掴むと、病室にある液晶テレビの電源を入れた。そこに写し出されたのは中国の急造輸送船の大群だった。そして、画面右横のテロップには『中国軍、明日昼にも横須賀上陸か』と書かれている。

秋菜は息を飲んだ。

これだけの大船団なら最低でも8万人の兵士を積載しているだろう。

上陸されたら自分達に勝ち目は無い。

「分かったでしょ？ 彼らの目的は陛下……と言うより皇室の血を途絶えさせること。今工作部隊が横須賀港付近に大量の地雷や爆薬を敷き詰めてるけど、3000人殺すのが限度でしょうね。つまり、上陸を許した時点で日本は崩壊する。しかし、私たちには輸送船を撃沈する術が無い。『きりさめ』もミサイルの弾数制限があるし、主砲射程内に輸送船を入れようとすれば相手のリーダーに引っかけ、ミサイルの飽和攻撃にて撃沈される。つまり打つ手はもう殆ど無いわ。諜報部隊が陛下をここまで連れて来るとは言っていたけど、そもそも皇居に入れるかすら分からない。それでもまだ抵抗するならば一つだけ方法があるけどね」

秋菜は加奈子は何を言いたいのかを悟った。かつて却下されたゲリラ戦だ。

あれを使わなければもはや勝機はゼロ。

そう言いたいのだろう。

日本を崩壊させないためには、ヒューマニズムや情は捨て去れ。

この事態を招いたのは無知な日本国民自身なのだから。

加奈子の目はそう語っていた。

そして、どちらにせよ取るべき方法など一つしか残っていない。

秋菜は『きりさめ』を味方に引き入れた功績として『救国連合』の12番目の理事となっていた。

発言権も持っているため、前のように扱われる事は無い。

「行つて来ます」

加奈子に言つと、秋菜はベッドから降り、立ち上がった。

またも激痛が走ったが、それも何処か遠い物に感じた。

「待ちなさい。貴方はまだ絶対安静よ。右大腿骨はひびが入っているし、肋骨も一部破損、そもそも筋肉痛の究極版でともに動ける訳が無いでしょうが」

加奈子の言葉をまともに聞く事は無く、秋菜は病室の扉を閉めた。向かう場所は『救国連合』本部最下層にある会議場だ。

秋葉は思った。

自分達が抵抗を続けている限り、日本は崩壊しない。
本当の崩壊は全ての抵抗勢力の剣が折れた時だ、と。

第11話 中国軍上陸前夜1（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

第12話 中国軍上陸前夜2

秋菜が会議場に到着した時、すでに舌戦の幕は開かれていた。

内容は勿論、中国軍上陸への対応である。

理事たちの統一見解として、『上陸時に地雷及び爆薬による総攻撃を行う』と言うのは既に決定していた。

中国軍は千葉県九十九里浜及び神奈川県横須賀市への上陸を行うと考えられたため、横須賀には遠隔起爆式の路肩爆弾や高圧電線への小型爆弾設置、そしてクレイモア対人指向性地雷の設置、九十九里浜では砂浜にありつたけのガソリンや重油をばらまき発火装置を設置、他にも対戦車地雷やクレイモアの設置が行われる事になっていた。

横須賀の場合本日中に住民全員の移動が決まっている（中国軍による虐殺が起こった場合国民からのバッシングや反乱を誘発すると政府が危惧したため）ため住民への被害が出る可能性は低い。

九十九里浜もそもそも人口が少ない上に移動の指示も出ているため問題無い。

ただ、問題があるとすれば、中国軍にこれが発動する前に仕掛けがあると気づかれれば計画は暗礁に乗り上げると言うことだ。

そして、怒り狂った中国軍は大量虐殺に走るだろう。

しかし、敵の正体はつきりしていれば無駄な行為に手を染める可能性は低い。

要はこの攻撃を仕掛けたのが日本国内のどこかに潜む反中組織であり、基本的に民間人とは関係ないことを知らせればいい。

中国も無駄な大量虐殺をして日本国民の怒りを買って反中組織へ合流されるのは非常に困る筈だ。

つまり、ある意味で中国と『救国連合』の利害は一致している。

『救国連合』としては国民を殺して欲しくは無く、中国としても無駄な虐殺をせずとも『敵』の正体が判明する。

中国としてはそれを叩き潰すだけで良く、『救国連合』としては自分たち以外の人間に傷はつかない。
勿論、それに乗ってくる可能性はこれまでの中国のやり方から見てかなり低い。

都合よく虐殺を行う大義名分とされてしまう可能性は非常に高いだろう。

しかし、方法はそれしか無かった。

本国に300万の兵を置く中国軍と、構成員総数が3万人の『救国連合』。

そもそも勝てる可能性は皆無なのだ。

勝てる可能性があるとするれば、それは米露の徹底的な支援だ。

既に中国の軍事力はアメリカの攻撃を凌げるレベルまで達している。陸戦は圧勝、海軍も時間稼ぎは出来、旧式機ばかりだが大量の戦闘機を持つ空軍も場合によっては勝利するだろう。

アメリカ単体では中国に勝つことは叶わない。

しかし、かつてアメリカにとって最大級の脅威であったロシアの力を借りる事が出来れば中国共産党は破滅する。

最初から理事たちは『救国連合』単体での日本正常化など不可能だと知っていた。

狂った国家を元に戻すには外的要因が必要だ。

内部から戻せるのなら『救国連合』は武器など持たない。持たずとも問題無い。

しかし、すでに日本は狂っている。

政府が中国のシンパとなった現在では言うまでもない事だったが。理事たちには『保身』などと言う考えは全く無かった。

今、この時に行動を起こさなければ日本は死体が溢れかえり、地面は血染めになる。

そのような事にならないように、我が身を犠牲にしても食い止めなければならない。

日本と言う国家のためだけでは無い。

自らの故郷、血族、友人、恋人、子供……それらを守るためにも、絶対にここでの失敗は許されない。

この作戦がもしも間違えていたのならば、もはや日本になすすべは無い。

何故なら、日本国内に中国の侵略を許さない、そう思う組織が消滅するからだ。

この作戦はとてつもなくリスクが高い。

ほんの少しの油断で全てを失う。

しかし、成功すれば中国軍に与える精神的ダメージは計り知れない。

だが、問題はそこでは無い。

中国には先程説明したように膨大な予備軍が存在する。

作戦が成功し、その場にいる兵士を怯えさせても、人間を変えればいいだけの事。

無限の体力を持つ敵と争う事に等しい。

すなわち、彼らが狙うのは必殺の一撃だ。

『救国連合』は絶対に長期戦を戦う事は出来ない。
ならば。

短期決戦で決着を付けるしかない。

しかし、これも不可能だ。

『救国連合』には中国に攻め入れる船など無いし、上陸したところで圧倒的物量で押し潰される。

だからこそ、米露の支援を望んだ。

元は武器の融通をしてもらうだけの予定だったが、助けを貰わなければ確実に全滅する。

米露どちらかの支援があれば、最低でも日本を占領される可能性は低くなる。

結果から言うと、理事たちの考えは纏まらなかった。

しかし、それは後の事であって地雷攻撃などは確定した。
あとはただ時間を待ち、作戦を発動するだけだった。

第12話 中国軍上陸前夜2（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

第13話 横須賀

翌日午前5時。

秋菜は横須賀港にいた。

既に中国の上陸艦隊は横須賀から南に50キロの地点まで接近し、現在は九十九里上陸部隊との時間調整のためか、一時的に停止している。

爆弾などの設置は完全に終了している。

あとは上陸を待つのみだった。

東には明々と輝く太陽が水平線から顔を出し始め、とてもこの一日が地獄となることを暗示しているように思えなかった。

ちなみに、秋菜たちの出発前に『救国連合』で大きな動きがあった。ついに、ロシア連邦政府から支援の確約を得たのである。

支援内容は戦闘機、攻撃機による近接航空支援とC4爆薬の援助だった。

その連絡文書には延々と中国への悪口や誹謗中傷が綴られており、『救国連合』内部でも拒否したほうがいいのでは、と言う意見が出た程だ。

ただ、近接航空支援については直接的な中国軍への攻撃となるため政府内部でも意見が割れており確約は出来ない、とも書かれていた。しかし、これまでは自衛隊の物や密輸品を細々と使っていたためC4の支援は大幅な戦力アップへと繋がる。

そして、ロシアが支援すればアメリカも必然的に支援する事になり、そうなれば次はEU（ヨーロッパ連合）も支援に乗り出すだろう。そうなれば中国は終わりだ。

なのだが……そう上手くいくかどうかはかなり微妙だ。

現在のロシアは反中親日の政府だが、アメリカは親中政権のためどうなるか微妙だった。

どちらにせよロシアの支援は大きい。

残念ながら今回の作戦には間に合わなかったが、これから待ち伏せ攻撃が楽になる事は間違いないだろう。

それから4時間が経過した。

時刻は午前9時。

中国軍は横須賀港から15キロメートルの地点まで迫っていた。

エスコートするのは海上保安庁の巡視船『しきしま』。

世界最大級の巡視船であり補給無しで地球を半周出来るとも言われる長大な航続距離を持つ船である。

しかし、その船のメインマストに掲げられていたのは日章旗（日の丸）では無く中国国旗である五星紅旗だった。

つまり、日本の旧名を冠した船は、倒すべき敵へと変貌していたのである。

この時間になると『救国連合』部隊も退避を開始する。

残るのは狙撃部隊と爆破部隊、そしてそれらの護衛部隊と脱出用輸送ヘリコプターだけだった。

秋葉は爆破部隊の隊長を務めることになっている。

爆破のタイミングは中国軍の半数が上陸を完了した時。

全く隊形を組めていないと言う絶好の好機を逃さずに爆破出来るかが力ギとなる。

あまり関係ないが、航空支援としてラジコン操作型のセスナに爆薬を満載したものを5機用意してある。

戦法は勿論特攻、しかし乗組員がいないので人的被害は出ないと言うとても合理的なシステムだった。

突っ込めば満載されたTNT爆薬が炸裂し燃料庫の航空燃料に引火、しばらく墜落地点一帯は炎に包まれる……予定だが直前に思いつきで作った武装のためあまり効果は期待出来ない。

次々と『救国連合』の部隊は撤退して行き、予定の部隊数になった頃には既に中国軍の輸送艦の先頭が接岸作業に入っていた。

そのすぐ近くでは『平和市民団体』の構成員が中国国旗を振りなが

ら『お出迎え』を行っていた。

それを横目に秋菜たちは近くのマンションへと入っていった。

前情報によると、中国は日本からの反撃など全く予想しておらず、自走砲や戦車の弾は一両あたり15発前後、歩兵用自動小銃の30発入り弾倉も一人あたり2つから3つで、兵士もとてつもなく油断しているらしい。警戒していればマンションなど上陸前の偵察で調べられるだろうが、上陸開始まであとほんの少しだし、すぐに撤退するので問題は無いとされた。

ついに中国軍は日本に上陸を開始した。

最初に輸送艦から出て来たのは大量の歩兵で、その後ろから戦車や自走砲が続く。

まさに見栄え重視の隊列だった。

そして、見栄え重視の隊列は攻撃に対して脆弱だ。

この時点で秋菜は作戦成功を確信していた。
重要なのは、ここから逃げ延びることが出来るかどうかだけであつた。

30分以上かけて上陸活動は進んで行く。

そして、約半数が上陸を終えた頃、秋菜は手で攻撃開始の指示を出した。

それに頷き、スイッチを握る隊員の親指がボタンに触れ、呆気なくボタンは押し込まれた。

第13話 横須賀（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

第14話 爆破（前書き）

若干グロテスク表現があります。苦手な方は注意して下さい。

第14話 爆破

港は硝煙の匂いと煙、そして中国軍兵士の残骸や血液によって地獄絵図と化していた。

最初に起爆されたのは上陸直前に行われた『道路工事』でアスファルトの下に敷き詰められたC4爆薬とTNT爆薬だった。

それらはアスファルトをた易く粉碎し、地面を隆起させる。

爆発の猛烈なエネルギーによって兵士は吹き飛ばされ、破碎されたアスファルトは兵士たちに追い撃ちをかけるように降り注いだ。

爆発した地面の周辺は兵士の肉片や血液によって赤く染まり、血液が蒸発したせいか、それともただの錯覚か、そこ一帯の大気は赤みを帯びていた。

中国軍は大混乱に陥った。

戦車は逃げ惑う兵士を押し潰し、兵士たちは爆発が起きていない西に逃げようとして押し合いになり、次々と海へ落下して行く。

そして、次に爆破されたのは中国軍の兵士が編成作業を行っていた駐車場の車止めと駐車されていた車。

車止めはその殆どが固形燃料で出来ており、中心部に100グラム前後のC4と雷管が埋め込まれていた。

爆発と同時に固形燃料は木っ端微塵に吹き飛び、辺り一面が炎に包まれる。

爆発はただ単に燃料を広範囲に拡散させるために行われた。

一つ一つの効果は小さいが、300台収容可能な駐車場だと効果は絶大だった。

駐車場は一瞬にして火の海となり、中国軍は再度の大混乱に陥り、未だに無事な、東の方向に向かって走りはじめた。

それに合わせるように、一つの爆弾が起爆された。

少し前に入居が始まったばかりの28階建てマンションの柱に取り付けられた物だ。

爆破された柱は、海側。

勿論バランスを失ったマンションは海へと崩れて行き……中国軍兵士にただ一つ残されていた空白の場所を蹂躪した。全てはこの一撃のためだった。

今回横須賀に上陸するのは6000人。

最初の爆発で500人を死傷させ、次の爆発で150人、ビル倒壊で300人から500人。

計算上では6分の1を削った事になる。

これではまだ足りない。

しかし、ビルを倒壊させた事によって中国軍を東西に分断する事が出来た。

勿論中国は各個撃破を恐れて合流を目指すだろう。

しかし、街に誘い込めばそこは地雷、爆弾と地獄が待っている。

確かに一度船に戻って他の場所で合流、と言う方法もある。

しかし、中国政府はそのような醜態は絶対に許さない。

一度上陸すれば、もはや戻る術は無いのだ。

元々中国軍は海岸線沿いに東京へと向かう予定だった。

一応、中国政府も街での襲撃の可能性を考えていたのだ。

しかし、こうなった以上一時的とは言え街へ進入せざるを得なくなつた。

合流地点まではたったの500メートルだ。

しかし、そこは完全に『救国連合』のホームグラウンドと化している。

大量の散弾地雷や固体燃料爆弾、対戦車地雷。

そして狙撃部隊とセスナ特攻隊。

予定では最大で中国軍の損害は3000人を越える事になっていた。ただし、この予想はかなりデタラメであり、当人たちも予測出来ていなかったりする。

あとはただ畏にかかるのを待つだけだった。

第14話 爆破（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

第15話 退避開始

横須賀は炎と黒煙に包まれていた。

中国軍は5時間以上の時間をかけて300メートルを進み、1200名もの戦線離脱者を出していた。

最も被害が大きかったのは遠隔操縦式セスナによる特攻だった。

墜落と同時に天地がひっくり返るような轟音と震動、閃光を発し、近くにいた兵士を跡形も無く吹き飛ばした。

対空機関銃など持っていなかったので迎撃も困難。

兵士の緊張は極限まで高まり、士気の低下は正常な思考能力を奪っていた。

それは、スピーカーで流されたプロペラの回転音ですらパニックに陥らせる効果を与える程であった。

そこには『栄光の』中国人民解放軍の姿は無く、あったのは、ただ逃げ惑う鼠の大群の姿だった。

しかし、だからと言って『救国連合』が猫である訳では無い。

ただ単に、爆弾の設置場所などが綿密に計画されていただけだ。

中国軍の進行は遅れた。

しかし、全滅させる事は不可能だ。

爆薬の量が絶対的に不足している上に、早ければ1時間程度で中国軍は航空支援を始めるだろう。

そして、横須賀の街は焼き尽くされる。

それまでになんとかしてここから脱出する必要がある。

脱出用の輸送ヘリは秋菜たちがいるマンションからおよそ1キロメートルの地点にある。

着陸可能で中国の対空ミサイルに撃墜されない場所がその地点しか無かったのだ。

『こちらホーク2。脱出開始時刻まで残り15分だ。脱出準備を開

始せよ。それと、つい先程九十九里の部隊から連絡が入ったのだが、5つの防衛線の内4つが突破されたそうだ。九十九里では戦死2名。現在はヘリへの移動を開始している。以上』

待機中の輸送ヘリから連絡が入る。

確かに、もうそろそろ脱出の準備を始めなければ危険だろう。もう既に遠隔操作での爆破を行う爆弾はこのマンションに設置されたものだけで、他はすべて自動起爆方式だ。

しかし、秋菜たちがいる部屋の上にいる狙撃部隊の任務はまだ終わっていない。

その隊長は秋菜の命の恩人であり、上司でもある嘉弘だ。

ここに置いていく訳にはいかない。

そんな事をすれば、きっと嘉弘はこのマンションの爆弾が起動するまで狙撃をし続けるだろう。

あと少しで狙撃部隊の仕事は終わる。

彼らがしていたのは人への狙撃では無く、反応しなかったトラップの起動だ。

対人狙撃をすれば場所が割れてしまう。

しかし、トラップ起動の場合ばれる心配が無い。

何故なら、中国軍兵士からみればトラップに引っ掛かったようにしか見えないからだ。

そして、起動しなかったトラップでこのマンションから狙う事が出来るものはあと12個だ。

狙撃部隊の人数は嘉弘を入れて6人、1人2つを起爆すればいいのだから、時間がかかっても5分以内に片付くだろう。

秋菜は腰のホルスターから愛用の拳銃……ベレッタM-92Fを取り出して弾丸を装填した後ホルスターに戻した。

一応アサルトライフルも持っているが、2つしか弾倉を持って来ていない。

ライフルの弾が無くなってから拳銃に弾を装填していればタイムロスが大き過ぎる。

自分の装備をチェックした後、秋菜は隊員たちに脱出開始の指示を出した。

隊員たちは了解の返事をしてマンションの階段を降りていった。

秋菜が向かう場所は2階上の部屋だ。

そこに狙撃部隊がいる。

秋菜は階段を昇り、狙撃部隊のいる部屋の扉を開けた。

嘉弘たちは既に脱出の準備は出来ているようだった。

秋菜は安堵する。

もしかしたら、対人狙撃に踏み込んでいるかも、などと考えていたが、どうやら違ったようだ。

「よし、もうここには用は無い。あとは無事に本部まで帰るだけだ」
嘉弘は隊員たちに言った。

隊員たちは頷き、部屋を後にした。

「秋菜、どうして俺たちの部屋に来たんだ？」

「高橋さんがもしかしたらここに残って狙撃し続けるんじゃないか
と思ったんです」

「いくら俺でもそこまで向こう見ずじゃ無い。引き際くらいは弁えてるよ。よし、早く行かないと時間切れになってしまうぞ」

嘉弘は秋菜に言々と部屋を出ていった。

秋菜もそれを追って部屋を後にする。

あとは、ただ本部に戻るだけ。

しかし、それが容易では無い事は誰もが知る事だった。

第15話 退避開始（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

第 β 1話 日本国内閣総理大臣（前書き）

α は味方側での視点変更、 β は敵側への視点変更です。

第β 1話 日本国内閣総理大臣

「総理！ 緊急事態が発生しました！」

話は少し戻って、秋菜たちが脱出を開始する4時間前、すなわち爆破開始から1時間後、時の総理大臣である大西和昭の私室に一人の男が飛び込んで来た。

「どうした？」

男の名は平野則和、総理の主席秘書官である。

則和は蒼白な顔で言った。

「少し前に入った情報ですが、横須賀、九十九里に上陸した人民解放軍が正体不明の武装組織によって攻撃を受けているようです。恐らく、右翼の連中でしょう。武装組織はかなりの弾薬を所持していると見られ、遠隔起爆式の爆弾や地雷などが多数設置されておりま

す。共和国政府（中華人民共和国）からはお怒りの連絡が……」

その言葉に和昭の顔色は目に見えて青色に変わり、テーブルに置かれていた灰皿を地面にたたき付けた。

「公安と警察、治安維持軍、全て使って、その団体を捜せ。そして、構成員を一人残さず殺し尽くせ。共和国の機嫌を取らなければ、私が殺される。それで、被害は？」

「もしもそれが100人を越えていれば、確実に殺される。」

恐怖に震える声で目の前にいる秘書官に聞いた。

「具体的な被害は不明ですが、最低でも300人以上が死傷している模様です」

和昭の思考は停止した。

終わりだ。

犯人を捕まえて処刑しても共和国の怒りは収まらないだろう。

きっと、和昭の命を求めて来る。

それは駄目だ。

自分の命を永らえ、富を築くために国を売り渡したのだ。

殺されれば本末転倒である。

どうすればいい？

自分はまだ死にたく無い。

そもそも、右翼の馬鹿がやらかした事を何故自分が償わなければならないのだ？

そのような事、ふざけている。

自分とは関係ない。

そう、関係ないのだ。

「くそ！ くそ、くそ、くそお！ 右翼の糞どもめ…… やってくだな！」

和昭は頭を抱えながら、窓際に向かい、やり場の無い怒りを窓ガラスにたたき付けた。

そして、あることを思い付いた。

捕まえた犯人を中国に送ればいい。

交換条件として自分の命を助けてくれ、と言えば恐らく大丈夫だろう。

右翼などと言う異端者は、中国で惨たらしく殺されればいい。

そうだ、そうに決まっている。

それを思い付くと、捕まってもいないのに気分が高揚し、中国軍の出迎えに行こう、などと思い立った。

「平野。ヘリの用意をしろ。九十九里の人民解放軍の司令官に会いに行く」

「は？ 九十九里は現在戦場です。このことヘリで出て行けば、右翼の連中の恰好の標的です。どうか、思い止まって下さい」

「ふん。右翼の連中がどうした。どうせ旧式のボロ装備ばかりだろうよ。そもそも、人民解放軍が守ってくれるに決まっているではないか。私は中国にとって、最重要人物なのだから」

そう言つと和昭はヘリの手配を強行した。
それが最悪の選択だった事も気づかずに。

ヘリの準備が出来たのはそれから2時間後だった。

和昭は則和を帯同して政府専用ヘリに乗り込んだ。

扉が閉められるのとほぼ同時にヘリは空へと舞い上がる。50分もあれば九十九里に到着する。

操縦士は海から迂回するルートを提案したが、和昭が最短距離での飛行を主張したため戦場の真上を通るルートとなってしまうのだ。50分が過ぎ、もうもうと黒煙を巻き上げる九十九里が見下ろせる位置まで到達した。

その光景に和昭は息を飲む。

この様子では、死傷者は1000人を越えていてもおかしく無い。それでは許して貰える可能性は限りなく低い。

ヘリはまっすぐに進んで行き、急旋回した。

「な、危ないじゃ無いか！」

和昭が操縦士を怒鳴りつける。

操縦士は青ざめた顔で言った。

「当機はミサイルにロックオンされています。このままでは、撃墜されてしまいます」

「な……っ！」

和昭、いや、このヘリに乗っている全ての人間の思考が停止した。

少しの間を空けて和昭が叫んだ。

「戻れ！ 戻るんだ！」

和昭の言葉に操縦士は頷き、再度の急旋回を行った。

しかし、このヘリは所詮民生品、軍用ヘリのように無茶な挙動は出来なかった。

旋回に手間取っている間に、浜から少し離れたコンビニから白煙を吹き出す『何か』が射出される。

それが何であるか分かった操縦士は顔面蒼白になりながらも必死でヘリを旋回させていく。

しかし、命中精度世界最高とも言われるステインガー携帯地对空ミ

サイルを振り切る事は出来ず、メインローターが吹き飛ばされ、コントロールを失ったヘリは総理らと共に道路へと墜落、大爆発を起こした。

勿論、和昭ら乗組員の体は粉々に吹き飛ばされていた。

第β1話 日本国内閣総理大臣（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。最近若干スランプ気味でクオリティが下がってしまいかもしれませんが、どうかご了承下さい。

第16話 負傷（前書き）

今回はいつもより少し短いです。

第16話 負傷

秋菜たちはマンションから脱出し、ヘリの待つ広場へと向かう。広場までは1キロメートル。

走って行けば10分程度で到着する距離だ。

しかし、この街には自分達が仕掛けた大量のトラップがある。

場所は分かっているが、地図を確認して歩かなければいけないため時間がかかる。

それに、中国軍もヘリ降下部隊を投入している筈だ。

確かにあのマンションの見晴らしは良かったが、海で大きく迂回されれば分らない。

マンションから50メートル程離れた所で秋菜は爆弾の遠隔操作スイッチを押した。

マンションの基礎部分が破壊され、マンションは南東方向に倒壊する。

地上に到達する瞬間、轟音と砂煙が辺りを覆った。

煙が少し晴れるまでその場で待機し、進行を再開する。

しかし、それはヘリの音によって中止を余儀なくされる。

南、北、西に3機の輸送ヘリ。

どれもが中国人民解放陸軍の物だ。

逃げられる場所は東だけ。

恐らくそこには上陸部隊がいるのだろう。

戦うべきか、それとも逃げるべきか。

ヘリの下をくぐり抜ければ逃げる事が出来るかもしれない。

しかし、もしヘリの右にグレネードランチャーやガトリングガンがあれば終わりだ。

東に逃げれば、完全に包囲されて殲滅の憂き目にあうだろう。

全ての小銃にグレネード射出器が装着されているため戦う事自体は

不可能では無い。

しかし、手間取れば降下が終了してしまう。
どうするべきか。

秋菜は短く舌打ちをすると、自分の小銃に装着されたグレネード射出器に指を掛け、北でホバリングしているヘリの開け放たれた扉の中へとグレネードを叩き込んだ。

示し合わせたかのように嘉弘や他の隊員が北に向かって走り出す。秋菜もそれを追って走り出し、そして。

西のヘリから降下した兵士に撃たれた。

当たった場所は右上腕部、左胸部、右下腹部。

それは、限りなく致命傷に近かった。

秋菜は地面へと倒れ込む。

撃たれた場所は完全に麻痺して感覚が無い。

「……！？……！」

誰かが何かを叫んでいる。

しかし、何も聞こえない。

辛うじて目は見えたが、誰かが駆け寄ってくる事しか分からなかった。

駄目だ。

私を助けに来たら駄目だ。

叫ぼうとしたが、声にはならなかった。

見えなかったが、誰が自分を助けようとしているのかは分かった。自分を助けようとするのは彼しかない。

だが、彼の名前が思い出せない。

ぼんやりと、彼の顔が浮かぶが、分からない。

駆け寄ってきた人物は秋菜を抱き上げ、北へと走り出す。

他の隊員たちの近くまで来た時、その人物は秋菜を抱いたまま倒れ込んだ。

隊員たちはその人物と秋菜をそれぞれ抱き上げ、必死に走り出す。その頃、秋菜の意識は完全に暗闇へと落ちていた。

第16話 負傷（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

第17話 『救国連合』 半壊と混乱の日本

「ん……？」

秋菜が目を開けると、そこは消毒の匂いがする部屋だった。身体を持ち上げようとすると、全身に鋭い痛みが走る。

前に倒れた時とは比べ物にならない程の激痛。

そして気付いた。

ここが集中治療室である事に。

秋菜の身体には、大量のコードが取り付けられ、それは傍らにある計器類に伸びている。

そうか。

自分は、撃たれたんだ。

秋菜はあの光景を思い出す。

ヘリにグレネードを撃って、横から中国軍兵士に撃たれて……

……？

その後が思い出せない。

確か、誰かに助けられた筈だが、その前後に何があったのかが分からない。

「目が覚めたみたいね」

少し遠くから声が掛けられる。

その方向に目を向けると、そこにいたのは前に気を失って目が覚めた時にも近くにいた、秋月加奈子だった。

「まだ動いては駄目よ。貴方の怪我、一歩間違えば死んでた……と言っより、ここに着くまで生きてたのが奇跡のようなものなんだから。右上腕骨複雑骨折、左肺損傷、肋骨2本骨折、右腎臓損傷。ざっと見て全治3ヶ月の大怪我よ。得に肺はまずかったわ。1センチずれてたら心臓だったし」

それは、秋菜としても衝撃だった。

そこまで酷いとは思わなかったのだ。

この状況で全治3ヶ月は致命的なロスだ。

リハビリなども考慮すれば最悪半年以上かかるかもしれない。

そんなこと、ありえない。

そんなに時間が経てば、日本の国旗は真っ赤に染まってしまう。

『救国連合』は自分がいなくても動いて行く。

しかし、その戦いを見届けるだけなんて、苦痛だけしか残らない。だが、負傷した自分は足手まといだ。

ならば、見ているだけのほうがいいのかもしれない。

「秋菜」

しばらくして、加奈子と呼んだ。

秋菜が加奈子の方向に向くと、苦しそうな顔で切り出した。

「貴方に言っておかないといけない事があるの」

その言葉は、これから言う事の深刻さを物語っているようだった。

秋菜にとてつもない不安感が襲い掛かる。

それにも構わず、加奈子は切り出した。

「高橋さんは、死んだわ」

コノヒトハ、イッタイナニライツテイルンダ？

「貴方を助けに行つて、逃げる途中、頭を撃ち抜かれて」

キキタクナイ。ソンナコト、シンジラレナイ。

「即死だったわ」

チガウ。アリエナイ。アノヒトガ、シヌハズナイ。

秋菜に浮かぶ言葉は否定の言葉だけだった。

だって、あの人は……

その瞬間、あの光景がフラッシュバックする。

自分が撃たれて、必死で助けに来た人物。

逃げる途中、倒れ込んだあの光景。

そう、あの人物が誰かなど、分かりきっている。

そして、加奈子は嘘をつかない。

残酷であろうとも、純粋に真実を突き付けて来る。

つまり、嘉弘がもう二度と秋菜に向かって笑いかける事は無い。

話しかけて来る事も無い。

「そう、ですか」

長い沈黙の後、秋菜は言った。

「それと、第5理事の大村さんが意識不明の重体。まあ、助かる可能性はゼロね。弾が肝臓やら脾臓やらをぐしゃぐしゃにしてくれたし、右の肺は機能停止状態で脊髄、鎖骨肋骨を骨折。あと、第9理事の浅野くんが行方不明。どうやら裏切りが起きたみたい。と、言うかそもそもスパイだったんでしょね。実行犯は」

つまり、理事の死者2名と行方不明者1名、議会出席不能者が1名、理事の3分の1がいなくなってしまったのだ。

『救国連合』がまともに機能出来なくなってしまった。

「今回の作戦、戦術的には大勝だけど戦略的には大敗ね。中国は無尽蔵の兵力を持っているのに対してこちらは3万人で12人の幹部の内3人が機能不全に陥った。しばらくは大規模な作戦を実行するのは困難ね」

そう。

『救国連合』の理事は理事であると同時に將軍の役目も持っているのだ。

軍に例えれば將軍3人が殺されたに等しい。

大規模作戦の発動はしばらく不可能になるだろう。それまでに。

「それまでに、中国が国家権力を握る可能性は99パーセント以上。万事休す、と言った所かしら」

今後、日本はますます混迷の度合いを深めて行く事となる。
日本の崩壊は、まだ始まったばかりだった。

第1章 完

第17話 『救国連合』 半壊と混乱の日本（後書き）

これで一応第1章は完結です。これから少しプロットの書き直しなどを行うため最低3日最大6日程度時間を頂きます。誤字・脱字の指摘や評価・感想もお待ちしております。

第2章 解放 第1話 『鼠作戦』

西暦2012年8月。

夏休みで賑わう筈の海に観光客はいなかった。

いるのは、プレハブ小屋にもたれかかり、暇そうに煙草を吸っているデザート（砂漠）迷彩の戦闘服を着た男が2人だけ。

……人がいないのはどこでも同じだった。

東京のオフィス街でも、軽井沢のログハウス群でも、大阪の繁華街でも。

実際に人がいない訳では無く、ただ、出てこないだけ。

この年の6月を境に人が見えなくなった。

外にいるのは中国軍の兵士か公安、中国政府から許可を出された輸送業者だけだ。

6月に戒厳令が出され、午前6時から9時、午後6時から8時以外の外出は特例を除いて禁止されていた。

それ以外の時間に外出していれば即座に逮捕される。

日本政府は消滅し、現在は中華人民共和国・日本人民解放政府と名を変えていた。

天皇家は『救国連合』の助けによって皇居を脱出した。

皇居は中国の戦車によって踏み潰され、哀れな姿を曝している。

すなわち、日本は崩壊した。

『救国連合』は3人の理事を失い、1人の理事は全治3ヶ月の重傷を負った。

とてもでは無いが新たな作戦を実行する事は困難だった。

あの日から約2ヶ月。

『救国連合』は小規模作戦の実行を決定する。

その作戦とは、日本各地に設置された中国軍の通信局襲撃である。その中で最も重要なのが東京付近に存在する3つの通信局だ。

それらは日本に駐屯する中国軍の情報を統括するネットワークであり、占領すれば一時的ながら混乱状態に追い込む事が出来る。

ただし、重要なだけあって警備も凄まじく、10キロ以上離れたこの砂浜でさえ警備員が警戒を行っている。

冒頭に出て来た煙草を吸っている男の事である。

確かに油断しているが、殺す訳にはいかなかった。

通信機が心拍計と連動しており、死亡した場合、即座に警報が通信局に流れる。

警報が流れれば近くの中国軍部隊が飛んで来て防備を固められてしまう。

あくまでも隠密に事を運ばなければ意味がない。

「……」

少し前に『救国連合』の第11理事となり、今回の作戦の前線指揮官に任命された永田祐樹は沈黙していた。

彼が理事となった理由は簡単で、秋菜のような若い人間が必要と言う理事長の思惑による物である。

実際、祐樹は自分を救ってくれた『救国連合』に感謝していた。

あの後で『救国連合』が掴んだ情報によると、公安は永田孝一郎が1週間以内に出頭しなかった場合祐樹を惨殺して見せしめにしようと目論んでいたらしい。

その恩返しのために今回の理事就任を引き受けた。

ちなみに、理事長もただ若いから祐樹を選んだのでは無い。

祐樹は秋菜と同じく咄嗟の判断に優れ、近接戦闘では秋菜を上回る能力を示した。

しかし、秋菜のように射撃能力に優れていない上、感情が昂ぶり易いと言う問題点があった。

しかし、これ以上の人材はいない。

そして、今回の小規模反撃作戦『鼠（隠密）作戦』

の指揮官に抜擢される事となった。

小規模作戦だが難易度は大規模攻勢作戦のそれに等しい。

隠密作戦は精神的疲労が非常に大きく、実行者の士気低下を招く。

「麻醉銃で撃つてくれ」

祐樹は味方のスナイパーに命令する。

スナイパーはそれに頷き、対獣用の麻醉銃を取り出し、歩哨を狙う。獣用と言うことで連射は困難なため2人のスナイパーが狙う事になる。

いくら油断していても仲間が突然倒れれば非常警報くらい発する筈だ。

スナイパーが準備完了のサインを出す。

「射撃」

それに応じ、祐樹は射撃命令を下す。

同時に銃から麻醉弾が射出される。

それは狙いと寸分違わぬ腕の静脈へと吸い込まれていった。

歩哨2人が同時に痙攣し、浜辺へと倒れ込んだ。

「進行」

祐樹が命令を出すと20人以上の隊員たちが一斉に動き出し、歩哨がもたれかかっていた建物を制圧する。

制圧が終わると近くの建物を徹底的に調査し、砂浜を後にした。

第2章 解放 第1話 『鼠作戦』（後書き）

誤字・脱字や文法におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。
また、通算PVが8000、通算ユニークが3000を
突破しました。

第2話 前進・撤退

あれから1時間が経過した。

しかし、進んだ距離は1キロにも満たない。

まだ施設まで9キロ以上あると言うのに、祐樹たちの眼前にあるのは、戦車2台と装甲車3台、そして50人以上の兵士だった。

「聞いてないぞ、こんなの……」

聞いている訳が無い。

こんな重防御ならばこんな作戦が承認されることなど有り得ない。警備にあたっているのは1個大隊（約500人）と聞いていたが、この距離で50人も警備がいるのならば警備にあたっているのは連隊クラス、悪ければ旅団クラスだろう。

最悪の場合、師団クラスである可能性すら考えなければならないだろう。

既に祐樹たちの小隊のキャパシティを越えている。

大隊クラスの警備ならば上手く検問や警備所をすりぬければ侵入可能だが、連隊、旅団クラスになれば発見されずに侵入出来る可能性は10パーセント未満、師団クラスならば皆無だ。

戻るのならば見つかったとしても犠牲を出来る限り減らす事が出来るだろう。

「……行こう。5人分隊編成に変更して、茂みに隠れながら少しずつ前進して、夜に本格的な移動を開始しよう」

どちらにせよ、これしか道は残っていなかった。

戻ることなど出来ない。

他の部隊が2つの施設を制圧しても、自分たちが制圧できなければ混乱に追い込む事は出来ない。

作戦成功の条件は全通信局の制圧であって、1つか2つなら作戦は

失敗だ。

これは確かに小規模で、大局に与える影響は僅かだろう。しかし、それでも時間稼ぎにはなる。

「了解しました」

副官はただそれだけ言うと、隊員たちに手で信号を送った。隊員たちは指示に従い、音を立てないようにゆっくりと隊形を整える。

5人編成に変更した後は散開し、それぞれがそれぞれの援護を出来る位置まで移動し、動いているのか分からない程の遅い動作で前進して行く。

そして、中国軍の部隊から完全に死角となる位置に到達した部隊は一時的に休息の時間を得た。

それから5時間。

完全に日が暮れた。

中国軍部隊は僅かな見張りを残して晚餐へと入っている。移動には絶好の時間だ。

祐樹は無線機を3回叩いて移動開始の指示を出す。

一斉に動くと言われるため5人ずつ移動する。

晚餐を楽しむ中国軍兵士の声が聞こえてくる。

この様子なら多少音を出しても問題はなさそうだが、細心の注意を払って前進する。

全ての部隊が中国軍の監視範囲から抜け出せたのはそれから1時間が経過した頃だった。

無線連絡を聞く限り、どの部隊も同じような状況らしい。

どうやら情報部が誤翻訳をしたようだ。

旅団とすべき所を大隊と表記してしまったらしい。

つまり、作戦中止レベルの失敗だった。

作戦中止の通達は出ているが、どの部隊も戻る場合相当の損害を受ける可能性が高いため現場指揮官が拒否したのである。

そのため、『救国連合』日本奪還軍総司令部は救出部隊の派遣を決定した。

だが、救出の指定ポイントはこちらから2キロ以上離れた公園だ。

無事にそこまで到着出来るかは微妙だった。

それよりも通信局を制圧して脱出予定ルート of 部隊を退かせた方がいいかもしれない。

どうする？

祐樹は悩んだ。

通信局を制圧すれば機密情報も奪取出来る上、確実に脱出出来る。

救出部隊による救出の場合、恐らくヘリを使うだろうから、撃ち落とされる危険性もある。

「指定ポイントに向かおう。通信局に到着するまでに食料が尽きる可能性は高いし、通信局の近くにとつもない数の敵がいるかもしれない。出来る限り早く、此処を脱出した方がいい」

副官らも賛成した。

これ以上、ここにいることは得策では無い。

折角、あの部隊の監視の目をすり抜けられたのに、中止は残念だが、犠牲は出来る限り少なくしたほうがいい。

そう言う判断だった。

「軽機（軽機関銃）持ちを最前線に配置して、グレネード付きの小銃持ちは1番後ろに配置。それ以外は中間に入ってくれ」

撤退の場合は別に見付かっても問題ない。

それよりも、ヘリの到着とほぼ同時にポイントへ到着する方が重要だ。

早過ぎれば追撃部隊に殲滅されるし、遅過ぎればヘリが撃ち落とさ

れる。

到着予定は20分後。

走れば丁度いい時間となるだろう。

隊形を整えた後、部隊は一斉に公園へと走り出した。

第2話 前進・撤退（後書き）

えー、完全にスランプです。これまではクオリティは落ちるけど何とか書ける程度のスランプだったのですが、全く書けなくなっちゃいました。どうやら新しい連載の準備のせいでこうなっちゃったみたいです。出来る限り早く更新する予定ですが、1週間程度更新出来ないかもしれません。これからは二重連載となるので、これから更新スピードがほぼ確実に落ちます。こちらを優先して更新していく予定ですが、遅くても恨まないで下さい。誤字・脱字や文法的におかしい表現の指摘や評価・感想もお待ちしております。……やっぱり、現代戦記と異世界ファンタジーの同時連載は無謀だったかな……

第3話 ロシア参戦（前書き）

通算PVが10000、通算ユニークが4000を突破しました。
ありがとうございます。

第3話 ロシア参戦

「撃て！」

既にもう何回と繰り返した命令を祐樹は下した。

これまでに中国軍と遭遇すること16回。

その殆どが5人編成の偵察分隊だったが、最初の遭遇の際、通信部隊によって自分達の部隊の存在と位置が連絡されてしまうとと言う大失態を犯してしまったのだ。

そのせいで、行くところ行くところに中国軍の部隊が待ち伏せている。

その上、今回の敵は小隊規模。

少し前までは数でこちらが勝っていたため容易に勝利出来たが、数の優位が存在しない今回は正規軍と非正規武装組織の練度の差が大きく出る事になった。

こちらの弾は全く当たらず、中国軍の弾は至近弾や命中弾を幾つも出している。

その上、恐らくこの部隊は時間稼ぎに過ぎない。

ほぼ確実に、中国軍は大隊規模で自分達を包囲している。

現在は攻撃の準備中だろう。

もしも予想が正しければ、祐樹たちが生還出来る可能性は万に一つも無い。

生還が不可能だとするならば、せめて出来る限り中国の兵士を道連れにするだけだ。

祐樹は自分の身の不幸を嘆きながらも、いつもより冷静に指示を下していた。

何故だか、自分が死ぬ予感がしないのだ。

そして、その予感ハ的中する。

「本部から緊急入電！ …… 全部隊は集結して伏せろ、です」
一体何故？

そう思う前に祐樹の口は命令の言葉を発していた。

「総員集結！ 伏せろ！」

命令の数瞬後には何だか分からないが、圧倒的な死が接近してくる。
隊員たちは祐樹の近くに集結し、全員が地に伏せる。

3秒後、天地を揺るがす轟音と震動がここ一帯を包み込んだ。

祐樹が顔を上げると、そこには『何も無かった』。

中国軍の兵士は勿論、ガードレールや街路樹さえも。

あつたのは、ただ焰だけ。

死の焰が、辺り一帯を蹂躪している。

「本部から入電。『ロシア空軍による近接航空支援が開始された。』

現在救出へりをそちらに向かわせている、

その場で待機せよ』 以上です」

長い沈黙の後、

「…… ロシアが、参戦した？」

祐樹はゆっくりと、そう呟いた。

1時間前。

『救国連合』本部は大騒ぎになっていた。

『ロシア大統領が中国への宣戦布告に関する書類に署名した』

そのような情報が『救国連合』本部へと伝えられたのだ。

「これは大変な事になったぞ……」
そう。

ロシアが宣戦したとなれば、中国はまず後顧の憂いを絶とうとするだろう。

すなわち、『救国連合』に対する全力攻撃。

「アメリカだ！ アメリカの様子はどうなっている！」

1人の理事が『救国連合』情報本部を苛立った様子で歩きながら尋ねた。

「国防総省の動きは慌ただしくなっています。未確認情報ですが、海兵や空挺が出撃準備を開始したとの情報もあります。また、インド陸軍がベトナムを経由して中国へ進軍を開始したとの報告も。…最新情報です。ASEAN（東南アジア諸国連合）が中国への軍派遣を決定しました」

明らかにおかしい。

これは、確実に諸国間で密約が交わされている。

理事がそう考えた瞬間、その裏付けとなる新情報が舞い込んで来た。「更に新情報です。EU（ヨーロッパ連合）が全会一致で中国への非難決議と軍派遣を可決しました。また、モスクワからの情報によると、一連の動きは『正義と自由作戦』と言う名が付いた国際共同軍事作戦の始動段階のようです。ロシアの動きに呼応して旧ソビエト連邦諸国が中国への宣戦準備を開始した模様。全く動きが無いのは中東方面と南米、南アフリカのみです」

「ぬう……」

かえってまずい事になった。

中国はこの作戦が発動される前に『救国連合』を叩き潰そうとする筈だ。

実際、全世界が相手になれば中国は確実に負ける。

しかし、ベトナム戦争を遥かに上回る損害を相手に与えるだろう。中国にとって最も回避したいシナリオはチベット族などの独立問題を抱える民族がゲリラとして国内を跳梁し、破壊活動が行われることだ。

『ゲリラになっても意味が無い』

そう思わせるためには、既存のゲリラ勢力を叩きのめしてみせしめにすればいい。

恐らく、中国軍は既に『救国連合』本部の位置を特定している筈だ。

中国軍は2日以内に本部へとなだれ込んでくる可能性が高い。

『救国連合』始まって以来初めての防衛戦。

不安を隠しきれない理事は、情報室を出て会議室へと向かった。

第3話 ロシア参戦（後書き）

更新が遅れて申し訳ございません。このところ用事続きで、その上別連載まで始まってしまい、こちらの執筆時間がなかなか取れませんでした。誤字・脱字や文法的におかしい表現の指摘、評価・感想お待ちしております。

第α2話 連合軍

ロシア連邦の首都であるモスクワのシンボルとも言える赤の広場。その地下120メートル地点には、旧ソ連時代に作られ、現在でもその存在を知るものはほばいないと言われる会議場が存在する。

その会議室には数十年ぶりに明かりが点されていた。

会議室にいるのはロシア連邦、アメリカ合衆国など併せて37ヶ国の軍事的重要人物たちである。

彼らがここにいる訳は言うまでも無い。

全世界の覇権を握るために動きはじめた中華人民共和国への対応策協議である。

「まさか、中国が『あれ』を完成させていたとは……」

「そもそも、『あれ』は中国の技術レベルで出来る代物では無い筈では無かったのか？」

「『あれ』が完成したとなると、もはや我々も事態を静観し続ける訳にはいきませんな」

「確かに。『あれ』を中国のような国家が持てば、地球は終わりだ」議題となっているのは中国が開発した新兵器『電磁波放出式弾道ミサイル迎撃兵器』についてである。

『電磁波放出式弾道ミサイル迎撃兵器』とは、弾道ミサイルが宇宙空間へ到達する直前に静止衛星から強力な電磁波を放出する事によって弾道ミサイルの内蔵コンピュータを破壊し、大気圏への再突入を不可能にする兵器である。

その迎撃率はこれまでのMD（ミサイル防衛システム）を遥かに上回る85パーセントと考えられている。

中国がこれまでに打ち上げた気象衛星などおよそ70個にこの電磁波放出システムが搭載されており、現在、北京、上海、香港などの主要都市が存在する中国東部への弾道ミサイル着弾の可能性は2パーセント以下。

すなわち、近未来的にこれまで存在していた『核抑止力』が中国に對してのみ通用しなくなってしまう可能性が濃厚になってきたのだ。中国はアメリカなどに弾道ミサイルを撃たれてもこのシステムがある限り主要地域へのミサイル着弾は回避できるが、アメリカなどの世界各国は通常のM D、すなわちミサイルによる迎撃手段しか持たないため、迎撃率は格段に落ちる。

中国への核抑止力が消滅してしまうのだ。

つまり、最悪の場合アメリカさえもが中国の言いなりにならざるを得ない状況に追い込まれるのだ。

その後に待っているのはソビエト連邦すら為し得なかった全世界社会主義革命の悪夢。

そうなった地球は、これまで培われてきた世界の文化、歴史、思想のほぼ全てが否定され、独裁者による専制政治が行われ、日常的な虐殺が横行する『地上の楽園』へと変貌する。

マルクスは共産主義を『究極の民主主義』だと説いたが、実際は酷くいびつで矛盾した『民主主義もどきの絶対君主制政治』だった。

このような政治では人々に幸福を与える事は出来ない。

与えられるのは苦しみと絶望のみ。

確かに、民主主義・資本主義は格差を産む。

しかし、本当に格差が全くない世界が存在しているとすれば、それは完全に静止し、人々の動きが無い、無機質で死んだ世界のみだろう。

社会主義は一見して格差が全くないように見えるが、実際は『普通（資本主義社会）なら収入が大きい人間から本来支払われるべき給料を取り上げて無理矢理格差を調整している』だけだ。

勿論、支配階級は特例で世界最高レベルの贅沢を味わう事が出来る。

これ以上格差のある世界は存在しない。

朝鮮戦争、ベトナム戦争はソビエト支配階級がさらなる贅を求めた

せいで起こった戦争だと言っても過言では無かった。

中国にあのような兵器を持たせれば、その二の舞となってしまう。

矛先はまず日本、次にアメリカ、その次はEU、最後は親に近い存在であるロシアに向かう。

その矛はすでに日本を貫いている。

アメリカにとって、これは重大な危機であると同時にチャンスでもあった。

この頃アメリカから遠ざかっていたEUと関係を修復し、天敵ロシアと手を組んで世界全体の危機への対処を行う。かつては最大にして最強の敵だった日本。

今では……いや、あの時までは掛け替えのない盟邦だった。

あの時、無理矢理にでも政権交代を妨害すべきだっただろうか？

違う。

いくら気に入らない政党であつても、民主主義だ。

民主主義ならば文句を言うことなど出来ない。

しかし、今救つてやらなければ、共産主義に染色され、二度と隣で手を繋ぐ事は無くなるだろう。

それに、今回は世界全体の危機である。

その対処の方便に『日本の奪回』を入れても罰は当たらない筈だ。

各国は中国の愚行を止めるためにここに集まった訳だが、足並みが揃っているとは言い難かった。

武力での制裁を主張するロシアに対して、アメリカは限定的武力行使を主張し、EUは交渉での解決を主張する。

中国への経済的依存度が最も高く、出来る限り国交断絶は避けたいEUによる平和的交渉の主張に対してロシアは全国民的に反中で、中国への依存度が低いため武力行使による中国の解体を求め、中国への経済的依存度が決して低いとは言えないものの中国にあのような兵器を持たせる事に重大な危機感を持っているアメリカは日本を解放し、特殊部隊の投入による『電磁波放出式弾道ミサイル迎撃システム』制御装置の破壊を主張した。

議論は20時間以上平行線を辿り、最終的に出された結論は

『6ヶ月以内の中国共産党解体と日本解放』

だった。

短期決戦ならば経済的影響は低いとの判断からで、6ヶ月を超える場合EUは連合軍を脱退すると言っ条項が盛り込まれた。

作戦名は『自由と正義作戦』

作戦発動日 8月27日。

動員戦力 140万人。

かくして、ベトナム戦争以来の巨大作戦は論議の末に承認された。

第α2話 連合軍（後書き）

更新遅れて申し訳ございません。風邪をひいたせいでこちらの執筆時間があまり取れませんでした。それと、今回の話は幾つかのエピソードを無理矢理ねじ込んでいるのでもしかしたら変な部分があるかもしれません。もしもそんな部分を見つけたら連絡をお願いします。すぐに修正しますので。誤字・脱字の指摘や評価・感想もお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0767g/>

日本崩壊～最期の抵抗～

2010年10月17日15時10分発行